日本産学フォーラム　リベラルアーツ企業研修会
第３回　(2019 年 9 月 17 日開催　於大手町サンケイプラザ#310)

藤山：藤山です。皆さんご苦労さまです。ちょっとしつこいようですが、おさらいで、全部で 15 回、長丁場を予定していて、きょう、3 回目になってるわけです。3 回までが土俵をつくる。前回、リベラルアーツの隠岐先生のときに、有信先生から非常に面白かったって、東洋の話とか、日本の話っていうのも西洋でっておっしゃられたんですけども、本当にそのとおりなんですが、ここで西洋の特殊なものの考え方が世界に広まったっていうのはグローバリズムなんだと。広がっちゃったもののもとを正しておきたいっていうことがあって、土俵を整理してるということをやってるわけです。ですから、『西洋の「もの」の考え方の歴史』っていうのを、きょう、やっていただくわけなんですけども、そもそも非常に大胆な試みで、西洋哲学史を 1 時間半ぐらいでしゃべってもらおうっていう、大抵、みんなそんなことはできないということになるわけです。

哲学を専門としてる先生は、どこかの哲学者を専門としてる先生が多くて、こんなこと言っちゃうと、哲学者の 1 人なのかもしれないですけど、日本の哲学者で自分でオリジナルで考えて哲学を創始してる人って、そうなかなかいらっしゃらないんですけども、そうすると、自分が勉強して一番好きな西洋の哲学者、あるいは、自分が勉強してる学者の世界に引き付けて話が展開されていくと。そうじゃない話が聞きたいと私は思っていたので、これは、瀧先生に登場していただくしかないなということで、きょうは、瀧先生に、『西洋の「もの」の考え方の歴史』っていうのをお話しいただくことにしました。

それで、このプログラム全体の話、まだ続くんですけど、4 回目、5 回目、6 回目はこのとおりにいかないで混ぜようと。過去、現在、未来を混ぜて、しかも、科学技術、市場原理、民主主義を 1 個ずつやっていこうということで、次回は、過去というか、科学技術の歴史について。その次は、民主主義の最先端。これは情報科学によって変革されてしまいそうな民主主義。3 番目は、市場原理のもと。これは、一番もとの過去の部分。アダム・スミスの話なんですけども、こういうふうに未来の話と過去の話を混ぜたり、そういう工夫をしながら全体を進めていきたいと思います。ですから、この 15 の中の、このパズルが、きょうは埋まるんだなっていうような感覚を頭に置きながら聞いていただけるとありがたいかなというふうに思います。

きょうは、瀧一郎先生にお願いするわけですけれども、特殊ヨーロッパ的な考えと民主主義が言えるかどうか。科学技術が特殊ヨーロッパと言えるかどうか。市場原理が特殊ヨーロッパ的と言えるかどうかっていうのは、やや論争もないことはないんですけども、多分、この三つが極めて近いところに生まれて絡み合って育っていって、現代をつくっていったってのは、まず異論のないところで、その背景には、独特なものの考え方っていうのがあっただろうと。東洋だと全体を把握するっていうことに、非常に重きを置いたり、寓話的だったりするわけですけれども、西洋の場合には、言葉があって、言葉の与えられてる役割が非常

に強くて、分割して定義をすると。そこから全てのことが始まるというような違いっていうのがあるんじゃないかなと思います。

そういったようなことを、ざっと 2500 年から 3000 年分ぐらい、1 時間 30 分で話していただくと。こういう話なんですけども、瀧先生は、東京大学の美学芸術学部博士課程修了。美学者なんですね。正確に言うと。それで、このご案内に書いてありますように、ベルクソンの美学研究の概念に即しているというような論文があって、このベルクソンという人は、ちょっと私が説明できるような力がないんですけども、皆さん、読んでいただいて非常に難しかったと思うんですけども、課題図書で、今回以上に難しい図書はもうないと約束しますので、一応、早くも峠は越えたということですね。

このベルクソンの存在っていうのは、実は、その他の東洋哲学の存在と同じように、私の理解ですよ。西洋が生み出した 3 点セット。科学技術とか、民主主義とか、市場原理が行き詰まってる世界を、もしかしたら乗り越えるヒントを与える。絶対、乗り越えられる人だっていうことじゃないですよ。もしかしたら乗り越えられるヒントを与えてくれるかもしれないなっていうような位置付けにいる人なんですね。ですから、きょう、既にご質問なんかにも書いていただいて、ちゃんと読んでくれたんだっていうふうに、非常に感動しましたけれども、できましたら質問の際は、まず最初のほうは、きょうの瀧先生のお話に即した質問を先にしていただいて、その次に 2 番目の段階でこの課題図書に対する質問もお受けしたいというふうに考えます。

瀧先生は、皆さん、ご存じかな。今道友信先生って、先ほど言った定義でいうと、哲学を紹介する先生ではなくて、自分で哲学するっていうことを自分に課せられた先生ですけども、今道先生のお弟子さんで、非常に、あらゆる古今東西の文献を理解して話していただけるっていう特別な能力を持った人だと私は思っておりますので、きょうは、その先生にですね。最後のところでベルクソンが出てくるかもしれませんけれども、ベルクソンだけではなくて、『西洋の「もの」の考え方の歴史』っていうのを素早く理解して、民主主義や、市場原理や、科学技術と関連付けて話していただくとどんなことになるんだろうかというようなことを試していただきたいと。課題としては非常に重くて、そんなことができるんだったら何も苦労はしないよって、皆さん、おっしゃると思うんですけども、非常に困難に挑戦していただいたということで、瀧先生にお話ししていただきたいと思います。それでは、瀧先生、80 分か 90 分か、そこら辺の感じでお願いできたらと思いますが、よろしくお願いいたします。

瀧：ご紹介いただいてありがとうございました。瀧でございます。誠に好きな哲学者のお話をすればいいのかと思っていましたが、そうではなくて、非常に大それた、非常に大きな課題を頂戴したということに後から気が付きまして、もはや手遅れでございます。しかも、課題図書として最も難しい、皆さんを苦しめるようなものを課してしまいまして、あらかじめ、それについてもおわびを申し上げておきます。

それで、『西洋の「もの」の考え方の歴史』という題を、藤山塾長からいただきまして、この話をするということで、最初に考えた講演要旨なんですけれども、『西洋の「もの」の考え方の歴史』ということで、『西洋哲学の歴史を概観しながら、古代における原子論(atomism)の発生から近代における個人主義(individualism)の成立をへて、グローバリズムの3規範がいかにして形成されてきたかを考える』と書いてしまって、大変、これは無理だと。無理な課題は自分にかけ、しかも、要旨としてまとめてしまってどうしたもんだろうと、朝まで粘ったんですが、大きく言いますと、哲学と科学を大きく開扉して、何か問題が見つけられないかと。そして、一つの切り口としては、atom、それ以上分けることのできない不可分者。それが、individual。個人ですけれども、分けることのできないものというふうに変わっていくところに注目をしながら、ものの考え方の歴史がたどれればいいかと思います。

初めは、科学、scientia と、意識、consciencia の問題をめぐって世界観や人生、人間観がどう変遷してきたのかをたどりたいとも思ったのですが、やっぱり atomism のほうでいったらいいんじゃないかというふうなご示唆をいただきまして、こういう題にいたしました。目次なんですけれども、これも実に大ざっぱなもので恐れ入りますが、ものというところから考え始めて、西洋の文化の二大源流であるところのヘレニズムとヘブライイズム。それを融合する形で近現代になってどうだろうという大きなくくりでいきたいと思います。最初は、ものでございますが、皆さま、ものっていう言葉を端的に聞いたときに、何を思い浮かべられるでしょうか。多くの方は物質的な何か。目に見え、手に触れることのできる何かを、まず、ものと考えるんじゃないかと思うんです。

これ辞書で引いてみますと、1は空間のある部分を占め、人間の感覚で捉えることのできる形を持つ対象。物質的なもの。これがまず、今日、われわれが、ものと言われたときにイメージをする意味内容。それに対して2番目の意味で、人間が考えることのできる形のない対象という意味があって、これは、要するに精神的なもの。これも、ものという。なんですけども、日本語の歴史、大和言葉の使い方をたどってみると、むしろ、ものの第一義的なものの意味は、物質的なものではなくて、精神的なものだったっていうことが、まず、あります。それは大槻文彦先生の大言海。これは昭和10年ですけども、もっと前の明治からのですけども、こう書いてあります。もの、『神の異称。人にまれ、何にまれ、魂となれる限り、又は、霊ある物の幽冥に属(つ)きたる限り、其物の名を指し定めて言はぬを、モノと云ふより、邪鬼(あしきもの)と訓めり。又、目に見えぬより、大凡に、鬼』、万葉集の 740 では、鬼と書いてものを読みますね。魂、伊勢物語第23段では、魂と書いてものと読ませ、それを、『モノと云えり』と、こう書いてあります。

先ほどのアクティブラーニングでも、たまたま六条御息所の話が出てまいりましたが、あのもののけのものが、まさにここで言われている鬼とか、魂という、生霊っていうような、そういう意味でのものです。それは、なぜここで最初にものにこだわるかというと、ものと聞いて、物質的なものを、まず思い浮かべてるっていうこと自体が大変、実は私は問題にな

っていることなんだと思ってるんです。人物っていうときの物は物質じゃないんです。でも、今は人材っていって、材料という物質的なものに人間を例えて言う時代だということを考えたときに、ものっていうことを、もう一遍、ここで考えて見て、ものの考え方ということですので、人生観、世界観、自然観というようなものを広く含めて考えてみようと。

ちなみに、ものとことと、ものごとと、一緒に言いますけれども、これも普通の今日の感覚では、ものっていうのは、個々の感覚的な現象に現れた物質的なもので、ことっていうのは、むしろ抽象的で隠れていて見えない精神的なものと思われるかもしれませんが、これも全く逆でして、鈴木重雄という方の『幽顕哲学』っていうことを言った人がいるんですが、国学者で、彼は『古事記』などの言葉の用例を、大変に詳しく調べて知っておりまして、そのものとことっていうのを、この表にいたしましたように、根っこにある形而上的なもの、これがもの、主格であって、隠れている。奥に潜んでいる。それがあらわになって、形而下に個々のものとして現れたやつがことであって、日本語では奥と口っていうふうな言い方をしたときに、戸口に立っている現れたこと。こちらのほうが、個々の現象に、それこそ現れているものです。この根と顕、根顕というところから日本の神道の考え方として、ながらと。根顕がながらになって、惟神の道というのが、こういう形で出てくることでございまして、この辺りのところから入りたいと思います。

最初は原子論でございますが、ソクラテス以前にも哲学はありました。しかし、本当の哲学の話はソクラテスだと言われている。だけども、それ以前のイオニアの自然哲学者の中で、パルメニデスと、レウキッポスと、デモクリトスの、この 3 人を取り上げて、まず、パルメニデスが、『在るもの to eon は在り、在らぬもの to me eon は在らぬ』と、こういうふうに言い、『思惟することと存在することとは同一』であって、『実在は思惟とロゴスによって捉えられる』んだと。つまり、感覚的に知覚されたりするものではなくて、ロゴスによって考えられる。そういうものがあるものであって、不生不滅、不可分、分けることのできない不変不動のもので、完全な球に似ているとこういうふうにパルメニデスが申しました。

このパルメニデスの問いを受ける形で、原子論が、レウキッポスによって創始され、また、デモクリトスによって大成されたと言われております。レウキッポス、原子論の創始者ですけども、質的な差異を持つ sperma。種子です。sperma の、いわゆる物活論の影響を受けて、レウキッポスは質的な差異ではなくて、量的な差異しかない原子、atomon。不可分なるものというのを考えました。このレウキッポスの、さらに弟子のデモクリトスが、これはデモクリトスの言葉ですけれども、『甘いといい、辛いといい、熱いといい、冷たいといい、また色彩といい』。これは感覚、知覚できる、そういうものですが、それらは全て『ノモス(習慣・約束事)のうえのことにすぎない』。見掛けだけのものであって、実際にはただ、もろもろの原子、atoman と、空虚、kenon があるのみだと、こういうふうにデモクリトスは言いました。

ちょうどパルメニデスが、在るものは在り、在らぬものは在らぬと、こう言ったのに対して、空虚、無、虚空という『在らぬものが在る』というふうに切り返しているわけですが、このデモクリトスは、万物の根源、arche が、やはり、不生、不滅、不変のアトムであると。

これは形においては無限であるけれども、形態と位置によって互いに、大きさも入れることもありますが、形と大きさと位置の変化によって互いに異なっていて、空虚、空間の中は運動しており、その離合集散によって見掛け上の性質や変化が出てくるんだと。ここに至って、パルメニデスが本当にあるもの、完全な球に似ているとは言ったんですけども、そういうパルメニデスの真なる実在というのが、デモクリトスに来て、物に変貌しているというふうに認められます。

それでは、哲学ですが　philo-sophia。sophia。知を愛する、愛知の営みとしての哲学。これを始めたのがソクラテスだと。ソクラテスは神託で、ソクラテス以上の知者はいないという神託を受けて、本当だろうかと。その神託の意味を探求するために、知者を名乗っているソフィストたちを訪ねて、自分よりも知っているんではないかと、対話問答をどうするんですが、結局、彼らは、引用しますけれども、知者を名乗るソフィストたちは、『彼らも自分も、善美(kalon kagathon)にかかわる重要事について何も知っていない。しかし、彼らは「知らないのに、知っていると思っている」のに対して、自分は「知らないから、そのとおりにまた、知らないと思っている」。このちょっとした違いで、自分の方がより知者だということになるらしい。そしてこれが、神ならぬ人間に望みうる精いっぱいの知なのだ』と、こういうふうに申します。

無知の知の自覚によって、対話の相手に、そのものの持っている、しかし、気付いていない魂の美しさを、産婆のように引き出そうと、こういうことをソクラテスはするので、従って、知への愛というのは、それは何の意味かといえば、これは魂の世話をすることだというふうにソクラテスは言いました。epimeleia tes psyches。psyche を世話するということは、体の世話は、人は黙っていたって、飲んだり食べたり、毎日、しているけれども、魂の世話をしているのだろうか。具体的には、魂を美しく、心を磨くと。徳を身に付けるということを人はしていないのではないだろうか。そういうふうにして問答を続けていくわけです。

死についても、そういうふうに対話をすると、こういうふうに書いてます。『死を知っている者は誰もいないのに、人びとはまるで死が最大の害悪であるとよく知っているかのように、死を恐れる。これこそ、「知らないのに知っていると思う」という、最も不面目な無知にほかならない。私は、あの世のことはよく知らないから、そのとおりにまた、知らないと思っている』。『だから自分は、死を恐れないのだ』。こういうふうにソクラテスは考えてる。ちなみにギリシャで死というのは、今だと人間の体が滅べば、それで全部は終わり。死は、その人の全ての終わりだと、こういうふうに思いますが、ソクラテスの時代、死というのは魂が肉体から離れることであって、魂自体は肉体が滅んだ後も不滅であるというふうに考えていました。続けますが、ソクラテスの言葉ですが、『世にもすぐれた人よ、君はアテナイ人であり、知と強さにおいて最も偉大な、最も名の聞こえた国の一員でありながら、金銭をできるだけ多く得ようとか、評判や名誉のことばかりに汲々としていて、恥ずかしくないのか。知と真実のことには、そして魂をできるだけすぐれたものにすることには無関心で、心を向けようとしないのか』。『何よりも大切にしなければいけないのは、ただ生きると

いうことでなくて、よく生きるということである』。これは人の定義でしょうね。動物のようにただ生きるというのではなくて、人としてよく生きる。このよくという言葉は、ギリシャ語では、そして文脈では、美しく生きる。あるいは、正しく生きるということと同じです。

ここで言われていることは、なるほど。なぜ人は快楽を求めてやまないのかと。それは死の恐怖から目をそらすために快楽を求め続けるというふうに書いてあって、ベルクソンの話にしちゃいけないのかもしれませんが、ベルクソンの『道徳と宗教の二源泉』で、こういうことを言ってます。人は、もし快楽を、何か虚無から奪い取ったもの。死をあざける一つの手段と見ていなければ、これほどまでに快楽に執着しないだろう。実績、われわれは、永世を、つまり、魂の不滅を確信しているとすれば、絶対的に確信しているとすれば、われわれは、もはや、その他のことは考えないだろう。快楽をさほどまでに追い求めないだろうというふうにいっています。

さらにソクラテスの言葉をプラトンが書き留めていますが、『死にのぞんで嘆き悲しむ人を君が見たら、それは、その人が実は、知の愛求者(philosophos)ではなく、身体の愛求者(philosomatos)だったことの十分な証拠ではないだろうか。そしてその同じ人は、金銭の愛求者(philochrematos)でもあり、名誉の愛求者(philotimos)でもあるーーそのどちらかであるか、両方であるかだろう』。すなわち、『身体の愛求者＝金銭の愛求者＝名誉の愛求者』。これに対して、哲学者としての『知の愛求者』がいて、ここでは、いかに生きるかという人生観。そこから世界観、自然感が見えてまいります。

次の引用です。『(身体を愛してきた者の魂は)「物(soma, corpus)」的な性格のもの―すなわち、触れたり見たりできるもの、飲み食いできるもの、性愛のために資することのできるものーーただそのような存在だけが真実のものだと思いこみ、他方、肉眼には隠されてある不可視のもの、思惟されるだけのもの、哲学(求知)によってこそ捉えられるもの〔イデアと魂(psyche, anima)〕は、これを嫌い、恐れ、逃げるように習慣づけられている』。これはギリシャの人々だけでなく、今のわれわれも、本当にあるものというのは、見たり、聞いたり、食べたり、飲んだり、身体に関わっての、感覚に関わっての知覚し得るものだけがリアルな存在だと思っているんであって、知覚に上らない。身体を使って確認できない。そういうものは存在しない。あるいは、これを嫌って恐れるように逃げると。こういうふうに習慣付けられているとプラトンは書いています。

デカルトの『方法序説』の第 4 部を見ると、誠に同じことが書いてあります。『しかし、多くの人が、神を認識することにも、自分たちの魂(ame)が何であるかを認識することにさえも困難があると思い込んでいる。どうしてそうなるかというと、それはかれらが自分の精神(esprit)を、感覚的な事物を越えて高めることがけっしてないからである。かれらはイメージを思いうかべてでなければ何も考えない習慣にとらわれてしまいーーこれは物質的事物(les choses materielles)に特有な思考法だーー、イメージを思いうかべられないものはすべて、かれらには理解できないと思われるからである』。彼らというのはわれわれのことかもしれません。

このようなプラトンの哲学を、基本構図として二つに分けてみますと、『「生き延び」原理』。これはただ生きることを求めるのに対して、『「精神」原理』。これはよく生きることであるというふうに対比してみると、『「生き延び」原理』のほうは、『身体・金銭・名誉を志向』して、『死を恐れ、延命を願う。』。これはプラトンの言葉を使って、藤澤令夫先生がおまとめになったことを表にしてますが、それに対して、『「精神」原理』、よく生きるのほうは、『知・真実・魂の卓越性を希求』すると。『死を恐れず、延命を願わない』。従って、価値というのはどういうものに価値を見いだすかといえば、『「生き延び」原理』のほうは、生物的な生存に対する直接的な有効性な価値があるんだと。

今の言い方で言うと、数字で表される効率性、利便性、快適性、これを価値あるものとして求めるのに対して、よく生きるのほうは、『人間としてのトータルな価値』。すなわち、間接的かもしれないが、全体的な価値としての善を求める。あるいは、善美を求めるものである。ただ生きるのほうは、物。これは、物と書いてありますが、『「物」の局面にのみ着目する自然観』になってくるだろうし、他方のよく生きるほうは、『「意味」と「価値」と「生命」を基本にする自然観』になってくるだろうと。そうしますと、『「生き延び」原理』のほうの物の局面にのみ着目した自然観から、延長されてくることは科学技術が、まさにこの方法に推進されているということができます。

その科学技術、後で科学と、技術と分けて考えますけれども、この科学技術は、誠に普通の常識的な人々の生存、そして、いつの世でも改正が、そのように願っている方向に進んでいるので、ますます推進されてくるけれども、科学が対象としている物質というのは、どんなものかというと、数理哲学者のホワイトヘッドが、物質というのはセンスレスであり、バリューレスであり、パーパスレスであると。感覚、これはない。価値、これについてもない。そして、目的。これもない。つまり、感覚と目的と意味、価値。感覚と価値と目的。こういうものには、中立であるような、そういう次元のことであるのに対して、よく生きるのほうは、誠に人間として生きる意味を、そして、何に価値を求めるか。そして、生命というのを基本にした自然観です。

ですけれども、これは科学の技術が推進されるのに比べて、誰も身体や、金銭や、名誉を思考せずに、死を恐れずに、延命を願わないようなトータルな善を求めるというような哲学に賛同する人はいないんであって、今やこの哲学が、こういう原理であるが故に後退しているんだと、こういうふうに考えられます。実際に、プラトンに先立つところの、今、述べました。紀元前 5 世紀のレウキッポスとデモクリトスの原子論から、もの一元の自然像ができてきて、近世以降にそのような自然研究が基本になって、科学と技術が合体をして、20 世紀の後半以後ですけれども、今や科学技術立国ですから、一国の政治と経済を巻き込むような巨大な運動体に成長しているわけですが、その原理はプラトンの基本構図に従えば、よく生きる、精神原理ではなくて、ただ生きる、生き延び原理にのっとった運動であるというふうに見ることが可能です。

プラトンの話で、イデアというものがありますが、それについて、次の『虹の哲学』とい

うのをご紹介します。また、これはベルクソンの話なんで、ちょっと具合が悪いんですけれども、虹のさまざまな色合いについて哲学をする二つの仕方があると、こう言います。『第一の方法(唯物論的方法)』というのはどんなものかというと、『赤い色の赤らしいところ、青い色の青らしいところ、黄色の黄色らしいところを捨象していって、ただの色という空虚な抽象的観念に到達しようとする方法』です。これは、『個々の色合いの差異を消去して、暗黒の暗闇のなかにすべての色合いを溶解させるような否定的な方法』。ちょっと例えてみると、全ての色の絵の具を混ぜ合わせると真っ黒になってしまうような、そういう方法です。

それに対して、『第二の方法』。これは、霊性論的、スピリチュアルな方法と言っていいと思いますが、これはどんな方法かというと、『「青・紫・緑・黄・赤の何千という色合いをとり、これらに凸レンズを通過させることによって、同一の点に集中させる」方法』です。『この世界にあっては多くの色合いに分散した形で知覚されていたものを、かの世界において不可分の多様性の統一である純粋な白い光として直観しようとする方法』です。これは、ちょうど全ての色の光を混ぜ合わせると真っ白になるようなものです。

『形而上学の目的は』、これはベルクソンの言葉ですが、『個別的な存在者の一つひとつに固有の色合いを与えながら、そのことによって存在者を普遍的な光に結び付けている特殊な光線を、個別的な存在者のなかで捉え直し、この光線を発出する元の光源にまで遡ることである』。これは課題図書で書いてあったんですが、356 ページから 357 ページの『ラヴェッソンの生涯と業績』という論文の中の言葉です。このベルクソンの二つの虹の哲学に対して、ギリシャ哲学の藤澤令夫先生は、こう書いてます。これは、イデアの普遍性や一般性なんですが、『普遍性や一般性の意味に関するかぎり、..... ラヴェッソンの解釈にもとづいてアリストテレスの方法を説明した〔ベルクソンの〕これらの言葉は、皮肉にもむしろ、..... プラトンのイデア論的思想に、よくあてはまる面をもつ』と。こんなふうに第二の方法。つまり、この世では多数な、多くのものに分散して散らばっていたものを、それがレンズを通して分光される以前に、光源そのものにさかのぼっていくと、こういう方法を、プラトンのイデアっていうのは、まさにそういうものであるっていうふうに、藤澤先生はおっしゃってます。

続いて、アリストテレスですけれども、アリストテレスの考えというのは、古代ギリシャのというよりは、現在のわれわれが、その上に立って、いまだに考えている、そういう基本的な図式をいくつも残していますが、まずは、『学問の区分』。これは科学とか技術っていうことが、どこに入るかっていうところで、一つ、大変、参考になる区別ですが、まず他ではあり得ぬ、『ouk endechetai allos echein』。必然的なものを対象にする学と、他でもあり得る、『endechetai allos echein』。偶然的なものを対象とする学に大きく分けたときに、他ではあり得ぬもののほうに見ること。つまり、テオリア、理論と訳しますけれども、理論ということですが、そこから自然学、今の物理学ですね。数学、第一哲学としての神学が来るわけで、それを可能にする人間の能力が、人間の知能、在り方が sophia、知恵とか、episteme、認識とか、nous、知性であります。それに対して他でもあり得るというのは、ま

ずは行うこと。ああすることもできれば、こうすることもできるというような、praxis、実践が問題になると、そこから倫理学、政治学が出てまいりますが、それをつかさどるのがphronesis、思慮です。

もう一つ、他でもあり得るのにつくるということがあります。例えば、橋を造ることもできる。あるいは、塔を建てることもできる。他でもあり得る。そういう制作、poiesis から制作学が出てまいりますが、それは、techne、技術。これが可能にしてくれます。ただ、ここで技術と訳してる techne というのは、今日では芸術っていうものも入っているので、poiesis のポイエーマっていうのは、具体的には、アリストテレスは悲劇の死のことを考えていますが、ものづくりというときの作るということも、この techne に入ってまいります。

あと、2 番目ですが、これは、あまりにも有名なことではありますが、事物の原因、原理というものを、二つの方式によって説明しようとした。一つは、『すべての存在をその質料(hyle, materia, たとえば青銅)と形相(eidos, forma, たとえば像型)との結合体として具体的に捉え』、青銅という材料を、一つの像の型にはめることで、人物像が、例えば、アルテミシオンの悟性論像ができるというような、そういう質量、形相の説明原理。もう一つは、今度はスタティックなものではなくて、ダイナミックに動いている、『すべての生成と運動をその可能態(dynamis)から現実態(energeia)への移行・発展として捉えようとした』と。可能性、現実性と言うこともできますが、あるいは、潜在的な在り方をしているものから、顕在的な在り方をしてるものっていうことで、さっきの鈴木重雄のでいうと、幽顕の哲学でいうと、幽というのが可能態で、顕というのが現実態であります。

三つ目は、これは強調し過ぎても足りないぐらい大事な考え方で、主語、述語を、実体と属性という関係で考えるということは、日常の言語で、『はＰである』ということはどういう事態かというと、『「ＰはＳの述語となる」「ＰはＳに属する」』と、こういうふうにカテゴレインされるというふうに考える。ということは、実態としてのＳに属性、性質としてのＰが付与されて、それに属するものと考えられてくるということなので、このアリストテレスの考え方は、不可分の、最も小さな原子。この原子を実態と考えるような原子論の世界像に哲学的な根拠を与えるものです。もちろん、アリストテレスは、プラトン、ソクラテスと同じく、原子論に対しては、それが唯物論であるから、100 パーセント反対をしたんです。ですけれども、この実体に属性がという考え方で考えるものの見方は、言語の構造、普通の言語の構造とも合致しているものだけに、大変、強い見方であって、それが今日でも通用する考え方になってます。

しかし、一方、アリストテレスはそういうふうな物質中心的にものを見るのではなく、魂や心を中心に考えるという考え方をしているのであって、それは 4 番目に書いた『エネルゲイア』と『キーネーシス』の区別です。『エネルゲイア』っていうのは、これは先ほどの dynamis、エネルゲイアという可能、現実という対ではない、もう一つの運動、活動概念としてキーネーシスと対にすることを、アリストテレスはしていて、すなわち、『霊魂 psyche の活動』としてのエネルゲイアに対して、『物体 soma の運動』としてのキーネーシスを考える。二つの

運動を考えるんです。場所移動っていうのは、物があって、空間、そして時間の中で動いていくんだっていう、こういう運動の考え方で、これは今の自然科学が、物を考えるときの、運動を考えるときの運動です。

それに対して、実際に空間の中を動くんではないんだけれども、魂がかくかくと、例えば、火が燃え上がるような形で活動しているというときの活動は、これはエネルゲイアという言葉でアリストテレスは考えていて、ちょうど、それは目的が、その行為の中に内在しているような、そういう行為です。例えば、キーネーシスという運動は、私が駅まで行くっていうふうに考えると、歩いているときには、駅という目標に到達していないので、歩いていても目標が、まだ達成されていない。そういう身体を物体と見たときのような運動の問題です。

ところが、エネルゲイアのほうは、例えば、よく生きるというときには、よく生きてしまっている。よく生きるという現在形が、目的をその中で刻々と完了させているので、よく生きると同時によく生きてしまっている。あるいは、見るっていうことも、見ていると同時に見てしまっているっていう、その魂の活動としてのエネルゲイアは、その行為、活動の中に目的が、刻々と同時遂行されて完了しているような、そういうものであって、ということは、このエネルゲイアとキーネーシスの考え方は、現在の効率主義的な行為の在り方。これは人間が物体として扱われちゃうと、一刻も早くこの体をどこどこへ運んでくれっていうようなキーネーシスではなくて、例えば、楽しく踊って、踊りながら進んでいるときのように、人間本来の行為と生活の在り方。これは人間の本来といっても、魂としての私が、その目的を常に達成しつつ、ある活動としてエネルゲイアというのを考えると、こういうことであります。

次が、プロティノスなんですが、プロティノスになってくると、ギリシャの思想が、ソクラテスからプラトン、そしてアリストテレスへと来て、さらに、プロティノスで、古代ギリシャの思想を大成したというような感があります。この図式は、全てのものが、どこから来て、どこへ行くのかという発出、還帰の構造として書いていますが、あらゆるものは、一あるもの、一者と。to hen。そこから発出して、nous、知性、生命、zoe、存在、on、これが出てくる。これはアリストテレスでいうと、アリストテレスの神であるところの、他の全てのものを動かしながら、自らは動かないという不動の第一動者の次元が、この nous の次元です。この知性から次に出てくるのが、psyche、魂。そして、魂から今度は soma、物体が出てくるということになりますが、これは時間、空間ということで言いますと、まず、『存在の彼方』、epekeina tes ousias という、『存在の彼方』の『一なる一』であるところの一者。その下に、『多なる一』であるところの『永遠』。知性の層がある。基本的な実態が。そして、その下に、今度は『一なる多』であるところの『時間』。そして、最も下が、『多なる多』であるところの『空間』というふうに並んでいて、『空間』から『時間』、『時間』から『永遠』、『永遠』から『存在の彼方』へと還帰するというような、こういう構造になっています。

これは、形而上学的な存在の、どこから来て、どこへ行くかと。われわれは、どこから来て、どこへ帰るんだという問題に関わるような図式でございますが、一応、このように出し

ておきまして、これについて、ちょっと話を。

(無音)

瀧　後でやることにして、次に、ヘレニズムとヘブライズムっていうことで、ちょっと比較を試みてみました。これは、先ほども申しましたが、西洋の思想の二大源流という、『古代ギリシャの思想』。『ギリシア・ローマの哲学的伝統』と、『西洋中世近現代の思想』。『ユダヤ=キリスト教の宗教的伝統』というのが、二大潮流としてあって、これが互いに干渉するというか、そういう関係にあるわけですけれども、しかし、根本的に二つの伝統は異なっているということを、トレモンタンの『ヘブル思想の特質』という書物があるんですが、それに従って表にしてみました。

まず、ギリシャのほうですけれども、これは、『存在に対する善(agathon, bonum)の優位の思想』です。そもそも、ソクラテスも善を価値と認めているわけですけれども、プラトンであっても、美のイデアのさらに上に善のイデアを。ですから、特別な善はイデアとも呼ばれないような部分でありますし、また、プロティノスでも善なるもの、1なるものというふうな、究極の存在の彼方の神、哲学者の神ですが、そういうものを考えているので、古代ギリシャの思想は、存在論というふうにまとめずに、『善一者論』と。『agatho-henologia』というふうに考えることができる。

それに対して、キリスト教の伝統のほうは、善に対しては、むしろ『存在(einai/on, esse/ens)』。存在の優位の思想です。もちろん、旧約の、ヘブライの側では、『出エジプト記』で、神がモーセに名乗るところがあって、私は愛であるものだという、エヒエ・アシエ・エヒエという言葉で言うんですが、そのような存在の存在というような、ヘブライ的存在とギリシャ的存在は違うんですけれども、存在有意の思想として、『ontologia』を形成しているということが言えます。

次からは大胆に大きく比べてるんですけれども、プラトンにおける分有、メテケインというのは、イデアを、個々のものが分かち持つ、パーティシフェイトすることによって伝承してくるということなので、具体的に言うと、美のイデアで言うと、あらゆる地上の個々の事物は、美しいものがいろいろとあるわけですが、夕日も美しい。あるいは、モーツァルトの音楽も美しい。あるいは、彫刻も美しいというふうに、個々、さまざまな形をとって美しいものが現れるのは、その全てが美しくされてるからであって、ということは、美しくしてるものが、それぞれの特殊的、個別的な事象に現れてくるということなので、美のイデアが、もろもろの美しいものどもに分有されることによって個々のものが美しくなると。こういう分有という説明の仕方をしている。これが、かの世界と、この世の超感覚的なイデアの世界から、現実のイデアを分有し、あるいは、イデアに参ずる。あるいは、預かるものとの関係が、分有ということで成り立っている。

そういうのがヘレニズムなんですか、ヘブライズムのほうは、これは、分有に当たってる

のが、聖書における創造ということが、神と、つまり、創造者と被造物の関係ということになります。ギリシャのほうは、感覚的世界というのは、『下降によって生じる』と。先ほど書いたですけれども、S っていうところから A、さらには、C へと下りてくるというところで、知性から魂、魂から物体というふうな感覚的な空間の次元へと下りてくると。こういうことでありますが、ヘブライズムのほうは、むしろ感覚的世界というのは、上昇によって生じるというふうに考えます。これは、これでちょっと使ってみますと、C から S に向かって上昇するということが、S から D ダッシュに向かって下りていくっていうような、上昇と下降が一つであるような運動っていうのが考えられるのでありまして、そこは、下降と上昇っていう二つの運動が比べられているわけですが、どっちも一つに考えるような見方も可能かと思うんです。

続いて、ものをつくるという、ギリシャ、ローマの伝統でいうと、これは制作、fabrication ですが、この制作というのは、『周辺から中心へ、多から一へ』向かう。つまり、物質的なもの、もろもろの多なるものを、物質的なものから出発して、それを結合して組み合わせてものをつくっていくという、こういうつくり方をギリシャではしてるわけで、デミウルゴスという宇宙を造った神、創造神。これはまさに設計図であるところのイデアに合わせながら制作をする。芸術家のように制作をする。芸術家のようにというよりは、物を組み合わせてつくり上げていく、職人のようにつくり上げていく作り方。

それに対して、聖書的な、ヘブライズムのほうの創造というのは、むしろ『中心から周辺へ、一から多へ』と進んでいくわけで、統一から出発するっていうところで、その 1 なるものが分割されてくると。こういうことで、ちょうどそれは生物における有機的な組織が、一つのものが細胞分裂をして組織をつくって、どんどんと大きくなっていくっていうことにも例えられるようなものですが、いずれにしても、ギリシャ的な神のデミウルゴスによる制作と、ユダヤ、キリスト教の伝統の中での神による創造というのが、このように対比できるかと思います。ちなみに、イノベーションという新しい価値の創造っていうことをいいますけれども、明らかにイノベーションは、既にある、多なる、ここでいうと物質的な要素を組み合わせて、新しい組み合わせの中でつくっていく制作に当たっているので、全体から出発する。統一から出発して分割する。分裂してつくっていくっていう、クリエーションの作り方ではないということが言えるかと思います。ちょっと進んじゃいました。言えるのではないかと思います。

今度は、二元論の話なんですけども、ギリシャの場合は、霊魂と肉体。psyche と soma。これは、psyche、魂の世話を、体の世話ではなくてと、こういうふうに言ってるっていうこの二元論は、どっちかなんです。二律背反なので、従って、肉体っていうのは悪いものだと。soma は、われわれのセーマであると。肉体はわれわれの墓場であると言われるぐらい、ギリシャの伝統では肉体的なもの、物質的なものから目を背けて、そこから逃れて魂のふるさとに帰ろうと、こういうふうにいうので、少なくとも、この肉体がそれとして肯定されてはいない。むしろ、感性的なものは悪であるというふうに考えるのに対して、ユダヤ、キリス

ト教の伝統では、そういうことはないので、霊肉一致という言い方があって、霊、ruah とかpneuma、そして、肉、basar、sarx というこの二つの弁証法的な関係というのが、ヘブライズムのほうにはある。そもそもヘブライ語には肉体とか物質という言葉がないわけで、また、感性的なものは善。これは、ちょうどギリシャと逆で、悪っていうのがあるとすれば、それは霊的なものについて言われるので、次の旧約聖書の新共同訳を引いていますが、あれですね。『初めに、神は天地を創造された』うんぬんということがあって。

(無音)

瀧　これちょっと小さい字で見えないんですが、例えば、『神はこれを見て、良しとされた』っていう言葉が何遍も出ますですね。つまり、物質的に、そして感覚的に見えるものとして実現されているものを良しとされていると。最後は人を創造した後では、最後の行ですけれども、『見よ、それは極めて良かった』っていうふうに、神はお造りになった全てのもの。ここで言うならば、さっきので言うならば、肉体とか物質とか、感性的なものに対して大変良かったと言われている、こういう伝統は、物質的なるものに対する、この二つの伝統は、全く反対の立場っていうのが示されていると思います。

そして、次がすごく重要だと思うんですが、今回は原子、atom、あるいは、個人っていうindividual っていう、個の問題。個体とか、個っていうのがどうやってできてくるのかと。ギリシャの伝統では、物資的なものにぶつかることによって、その物質の力で個体になる。個体化は物質によるという考え方があって、これは、ヘブライズムではそうではないんです。個体化は神の創造によるものなので、私の魂っていうのが、他の人の魂でもなければ、宇宙の魂、宇宙霊魂のようなものでもなく、私の魂という個体的なものであり得るのは、それは、神による創造によってなんだと。聖書を見ると、神は人を己の形に似せてつくわけだけど、男と女につくる。創造されるっていうようなこととか、個体で分けていくというところに創造の意義あって、それが一つのものに戻れば、それでいいのではなくて、産めよ、増やせよ、地に満ちよではないけれども、1なるものが分散し、発散し、広がっていくっていうところに、個体化そのものを良しとする神の創造の意味がヘブライズムにはあるということです。

それでは、ちょっとあれなんですけれども、ゆっくり聖書を読む時間がないので、『民主主義』の所で、これは何度も言われてることなんですが、トクヴィルが『アメリカのデモクラシー』の中で、民主主義のことを書いているところが、個人主義と利己主義が、民主主義の中から出てくるというところを言ってます。『民主的な世紀には、人は誰でも自分自身の中に信仰を求めることを私は明らかにした。そうした世紀には、また、誰もがあらゆる感情を自分一人に向けるということを示そう。個人主義は新しい思想が生んだ最近のことばである』。この本の原著は1840年です。

『最近のことばである。われわれの父祖は利己主義しか知らなかった。利己主義は自分自身に対する激しい、行き過ぎた愛であり、これに動かされると、人は何事も自己本意に考え、

何を措いても自分の利益を優先させる。個人主義は思慮ある静かな感情であるが、市民を同胞全体から孤立させ、家族と友人と共に片隅に閉じこもる気にさせる。その結果、自分だけの小さな社会をつくって、ともすれば大きな社会のことを忘れてしまう。利己主義はある盲目の本能から生まれ、個人主義は歪んだ感情というより、間違った判断から出るものである。その源は心の悪徳に劣らず、知性の欠陥にある。利己主義はあらゆる徳の芽を摘むが、個人主義は初めは公共の徳の源泉を涸らすだけである。だが、長い間には、他のすべての徳を攻撃、破壊し、結局のところ利己主義に帰着する。利己主義は世界と共に古い悪徳である。ある形の社会の中に多くあって、他の社会には少ないというものではない。個人主義は民主的起源のものであり、境遇の平等が進むにつれて大きくなる恐れがある』

原子論というのが、個人主義という形で近代によみがえってくるような形があるんですけれども、それが民主的な期限のものであるというふうにいってます。デモクラシーの問題としては、別なところで書きますが、デモクラシーは祖先を忘れさせるだけでなく、子孫の姿を見えなくし、一人一人を、同時代の人々から引き離す。それは各人を絶えず自分だけの所に引き戻し、ついには自分一人の孤独な心に閉じこもらせてしまう恐れがあるというふうに、トクヴィルは観察しました。トクヴィル以前には、デモクラシーという言葉は、いい意味で使われませんでしたけれども、しかし、デモクラシーには、このような個人主義から、さらには利己主義の傾向を持っているということであります。

次に、ベルクソンが出てきちゃってあれなんですけれども、ベルクソンはデモクラシーについて、はっきりと分かりやすく二源泉の最後の章で言ってます。『それ故、人類はずっと後になって初めてデモクラシーに到達したことがわかる(なぜならば、奴隷制度の上に建設され、こうした根本的不正によって最大最難の諸問題から免れていた古代の都市国家は、擬似デモクラシーだったからである)。実際、デモクラシーは、あらゆる政治構想のうちで、自然から最もかけ離れたものであり、「閉じた社会」の諸条件を少なくとも志向的に超越する唯一の構想である』。開かれた社会に向かってのデモクラシーは、唯一の構想だと言ってます。

『デモクラシーは人間に不可侵な権利を賦与する。こうした権利が侵害されずにいるためには、すべての人々が義務に対して不変の忠実さを示すことが是非とも必要である。それ故、デモクラシーがその内容として取り上げる理想的人間とは、自分自身と同様に他人を尊敬し、自分が絶対的だと見なす責務に忠実であり、もはや義務が権利を授けるのか権利が義務を課すのかわからないほどに、この絶対的なものよく合一している、というような人間である。このように定義された市民(le citoyen)は、カント流にいえば、同時に「立法者にして臣民」である。それ故、市民の総体、すなわち、人民(le peuple)が主権者である。』ちょっと違うのが入っちゃってますね。

『こういうのが理論的デモクラシーである。それは自由(la liverté)を宣言し、平等(l'égalité)を要求する。そして、この敵対した自由と平等という姉妹を、彼女たちに姉妹であることを想起させ、同胞愛(la fraternité)を全ての上に置くことによって和解させる。

こうした角度から共和政治の標語、Liberté, Égalité, Fraternité《リベルテ、エガリテ、フラテルニテ》ですね、この標語を考察すれば、自由と平等との間のしばしば指摘された矛盾は、同胞愛によって止揚されるものであり、同胞愛こそ必須のものであることがわかるだろう。そこからして、デモクラシーは福音書的本質のものであって、愛(l'amour)を動因としている、と言うことができよう』。自由と平等というのは、簡単には並ばない。むしろ背き合う。その2人をかすがいのようにつなぐのが愛だと。博愛。『fraternité』だと。同胞愛と言ってます。

科学と技術という所になりますが、『近代自然科学的な思考の由来』っていうことで、『デモクリトスの原子論』と、『アリストテレスの実態、属性のカテゴリー』とが一つになったときに、この近代自然科学的な思考のもとが成立したということができるかと思います。原子論というのは、その後でエピクロスが、これは、原子というのは落下するわけですけども、落下するときに干渉し合うっていうような、パレンクリシスという、自由にそれ合うというようなことをいう、こういう原子論。さらに、ルクレティウスは、『物の本質について De Rerum Natura』ですけれども、ギリシャ語の physis、自然っていうのを、De Rerum Natura というふうに、物の本質というふうに訳したんですね。ルネサンスの後で、この原子論が翻訳されたり、古代の原子論が翻訳されたり、紹介されたりして、ここで大きいのは、ガッサンディが、この原子論を機械論と結合させる。一方で、デカルトは、このガッサンディと論争してるっていうことがあるんですが、このデカルトの二元論というのが、やはり近代自然科学的な思考の中では、もっとも、分水嶺を成す考え方だったかと思います。思惟する実態としての精神、延長ある実態としての物体。

しかし、『方法序説』で、こういう言葉があるのを、もう一回、読み直してみますと、『わたしは一つの実体であり、その本質ないし本性は考えるということだけにあって、存在するためにどんな場所も要せず、いかなる物質的なものにも依存しない。したがって、このわたし、すなわち、わたしをいま存在するものにしている魂は、』。私イコール魂。『魂は、身体〔物体〕からまったく区別され、しかも身体〔物体〕より認識しやすく、たとえ身体〔物体〕が無かったとしても、完全に今あるままのものであることに変わりはない』と。

だから、デカルトも唯物論的にこれを取って、機械論的世界観というふうに引っ張るのを、一歩、とどまって、デカルトは、しかし、『我思う、故に我あり』のわれっていうのは、何と考えていたかっていうと、魂と考えていたのであって、身体は、われである魂に所属する。もしくは、われである魂が所有するものであって、私そのものではないっていうふうに考えているっていうことは、大変、重要で、思想史的な流れで言うと、『古代における「物活論 hylozoïsme」と「原子論 atomisme」』。つまり、物が命を持ってると考えるような物活論。それに対して、先ほど説明していた atomisme ですね。物活論っていうのは、そもそも自然が内的な自発性をもって展開する何ものかなんだけれども、原子論というのは、そうではなくて幾何学的な差異しか示さないような、無限に多くの原子っていうことが説明するんですが、これが近代に至って、ライプニッツの dynamism、力動論と、デカルトの機械論という

のに受け継がれてくる。物活論が力動論へ、原子論が機械論へ接続してくるっていう、こういう流れです。

ちょっと時間が足りなくなったんで、最後、『原子論から個人主義へ』っていうことで、今回は、『自然における原子(atom)』っていうのが、『社会における個人(individual)』っていうのに変わるっていうところに目を向けて、その変わるっていうところで、科学の他に政治や経済に関わるようなところで、問題が近代の問題として発生してる。私の答えがないけれども、問い掛けは、個人っていうのは、それでは、体のように、他から、他から動かされるものなのか、それとも魂のように自らを動かすものか。『皆と同じ大衆としての個人』ということになると、民主主義における大衆迎合とか、大衆煽動っていうことが問題になっているけれどもどうかと。二つ目は、個人というのは自己同一的な存在、デモクリトス的な原子なのか、それとも、自己に矛盾を抱えた。つまり、合理性ということで説明のつかないような、エピクロス的な原子の存在なのかっていうことで、スミスからリカードにいたる個人主義的立場に立つ資本主義経済学への、合理的な経済人ということに対する考え方を、もう一回、考えてみる必要はないかと。

最後は、冗談のようですけれども、個人は atom か monade か、原子か単子かっていうふうに聞いてみたい。つまり、原子っていうことになると、人っていうのが物質的な最小単位っていうことと連続して考えられるんだけれども、そうではなくて、非物質的な単一体としての、ライプニッツの言った monade なのではないのかというふうに聞いてみたい。そうすると、モナドには、世界を映すさまざまなレベルがあって、裸の端子から心のレベル。これは意識的な表象のレベル。そして、最後は精神。一般的な認識のレベルっていうふうに、映す、映り方が、どんどんと純度が上がってくるっていうことです。

このように考えたときには、科学に対して、心霊科学。『la science psychique』。つまり、psyche の科学としての心霊学の可能性はないかっていうことを考えることができるんではないかと。最後は、愛に生きるっていうのは、あれなんですが、ただ生きるのではなくて、よく生きるということが大切であるとしたら、よく生きるというのは、今日の状況においては、どのように生きることであろうかと。グローバリズムの三規範は、いずれも成立当初においては、宗教的倫理性を根底に持っていた。それが今では、神や宗教に訴えることが、もはやできない状況になっているとすれば、それに代わるものは何であろうか。それは、愛ではないだろうか。よく生きることは、今日においては、愛に生きることではないだろうかというところで、お話を終えたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

藤山：はい。ありがとうございました。大変興味深い話だと思います。ヘレニズムとヘブライズムというふうにおっしゃられて、本当、ちょっと間違ってるかもしれないけど、単線的に言うと、ギリシャ哲学とキリスト教。この二つがなければ、西洋はやっぱりなかったわけで、その中から生まれてきた。それは中世の一つの安定ですね。いいも悪いも安定の時期っていう。封建共同体っていうものが貨幣の浸透によって崩れていくときに個人主義が強ま

てくる。その個っていう問題は、原子論と比喩していただいたっていうところがアイデアの一つだと思うし、逆にいうと、個人の個っていうのは、実は、独立した、完全に全き球なのであろうか。そうじゃなくて、いろんな概念から侵食されているものなのではないかっていうような形の、最後に問題提起もいただいたと思います。そうなってくると、民主主義とか、市場原理とかっていうのについても、理念的に完全に個人の、自分の判断を全きものとして追求できる。各人々が投票行動を起こすことによって決められていったり、それから、欲的な、人間として行動して、そこの中から標準化を得られる、市場という問題に関してっていうものも、哲学的な基盤が宗教的神の倫理っていうものがなくなった途端に、実は、もう支えているものはないんではないか。ないから、今、言われてるんではないかっていう問題提起もいただいたのかと思います。

ちょっと長くなりましたので、ここでちょっとトイレ休憩を入れて、まず、きょうのお話の中から感じたことであったり、ご質問であったりをしていただいて、後半の所で、課題図書の中で感じられたことというのを、ご質問したり、ディスカッションしてみたらいいんじゃないかなと思います。取りあえず、10 分間。私の時計ですと遅れてるんですが、10 分ですね。大体、8 時 35 分くらいまで休憩したいと思います。ありがとうございました。

＜休憩＞

藤山：哲学とは何かのところで、ソクラテスが死を恐れなかったっていう、それを説明をしていただいたわけですけども、一方、現世的に言うと、これによってプラトンも。これによってっていうことはないと思いますけども、プロトンは民主主義っていうのは、絶対的に行き詰まるという話を展開し、もとにもなってるし、先ほどお話があったように、19 世紀のトクヴィルでさえ、最初、アメリカにいるときは、なんでアメリカのデモクラシーっていうのは何となく動いてるんだろうっていうふうに見に行ったわけですよね。それで、彼は、貴族階級の出身なんだけれども、思弁的な考察を始めて、有名な個人主義と利己主義の問題に突き当たっていくということがあると。

市場原理のほうも、前回黒田先生がおっしゃられたように、共感というような、人間に対する共感みたいなものをベースに、人間というもの、経済活動っていうのを考えていたんだけど、経済学っていうのは、その後、そういった感情の論理っていうのを照らしながら、理論が数値的な方向にどんどん動いていたっていうこともあるわけで、それも、きょうの瀧先生のお話とちょっと近かった。アナロジーして考えることができるのかなっていうふうにちょっと思いましたけども、きょうの瀧先生のお話の中では、難しいところもありましたけども、私はこういうふうに感じましたとか、あるいは、単純なご質問でも結構だと思いますけども、皆さん、どうでしょうか。最低 1 人 1 回は意味のある発言をしていただかないと、私は帰しませんので(笑)。早いうちにみんながしそうな質問をしたほうが得だっていうのもあるかもしれない。いかがでしょうか。何かご質問なり。はいどうぞ。何さんだったかな。

山本：AGC の山本です。

藤山：山本さん。よろしくお願いします。

山本：前回、最後で指名されてしまったので、今回は積極的に。まず、初歩的なところから質問させていただければと思います。瀧先生、非常に分かりにくいところを素人に分かりやすく説明していただいたように個人的には感じてました。ありがとうございます。西洋のものの考え方について、いろいろと対立する考え方を中心に、多分、歴史の流れで説明していただいたと思うんですが、イントロとして、私の理解が正しければ、日本でのものの定義があって、それは、昔は精神的なところが中心であったのが、最近は物質的になってきているといったイントロの後に、西洋のところで、パルメニデスが思惟とロゴスっていう精神的なところから入って、物質的な atom、原子論につながっているというお話だったと理解してるんですが、ここの時代的な背景といいますか、西洋で起こった精神的なところから、物質的な流れの時代と、日本における精神的なものから物質的なところへの流れの時代的な、どういうふうに日本に入ってきたかっていうか。すいません。全然、質問の訳が分からないかもしれませんが、その辺について、ちょっとお話しいただければありがたいです。

瀧：ありがとうございます。難問ですね。日本において、精神的なるものが、物質的なるものとして。一つやり方としては、国語辞典で、ものっていうのを調べたときに、最初に出てくる意味を年とともに、バージョンとともに調べ上げていったら、明らかに、私は『大言海』を出しましたけれども、『大言海』でもはっきりと、そういうことが先に出てくる書き方ですよね。今は、現在の国語辞典では、場合によっては精神的な主体としてのものっていうのは書いてなかったりしますでしょうね。はっきりと戦後の日本は確実にそうですけども、それよりももっと前の明治時代にどうだったんだろうっていうのは、つまり、西洋の考えが入ってきたときにどうだったんだろうっていうのは調べる価値があります。ですけど、私が鈴木重雄さんのを引いたのは、それ以前の国学の伝統で本居とか、平田篤胤たちが神道の言葉遣いで、つまり、仏教が入ってくる前に、漢学が入ってくる前に、漢語が入ってくる前に大和言葉でどうだったかっていうことを調べようとしてるので、そこら辺を洗ってみたら、はっきりと西洋化の中で、ものが完全に物質的なほうへと変わっていく転換点というのは分かると思いますが、どうでしょうね。即答はできないけども、とても大事な。つまり、西洋でのそういう変化と、日本での変化っていうのを。当然、日本のほうが後だと思いますけどね。物質化するのが。

藤山：ちょっといいですか。間違ってたら訂正してください。もちろん、明治に西洋近代思想、バンッって出てきてますよね。そのときに、それまであった庶民ないし、普通の人の感覚っていうのは、どのくらい変わったかっていうのは、渡辺京二っていう人が、『逝きし世

の面影』っていうのを書いてあって、これは明治初期に来日した外国人が、日本の風俗、つまり、江戸時代の風俗を見てびっくりしたことっていうのをですね。明治の末になってくると、それがもうなくなってるものが、どんなものがあるかっていうと、いろんな人の証言で書いてある本で、こういうのを見ると、日本が明治時代にどういうふうに西洋に洗礼をされたのかっていうのが分かるっていうのと、もう一つ、ちょっとおすすめは、小泉八雲。小泉八雲って怪談が有名だけど、小泉八雲の怪談以外の日本のことを書いてる書物っていうのは、まさに西洋近代史、つまり、われわれと同じです。ほとんど。今の現代日本人が明治の初期にいきなりタイムスリップすると、そこにどんな世界を見たのか。どんな秩序を見たのか。その秩序に、彼は単に遅れてるとは見なかったんですね。感嘆をしたわけですよね。そういった感じから想像するっていうのも、一ついいんじゃないかなというふうに感じました。すいません。余計なことを言いました。他にどうでしょうか。はい。どうぞ。

竹吉：第一生命の竹吉と申します。ちょっと理解が乏しいので、大変、恐縮なんですけれども、スライドでヘレニズムとヘブライズムから、民主主義にお話が展開されていったと思うんですけれども、そのつながりの部分を、もう一度、ちょっと理解したくて、どうして紀元前とかのお話から 1840 年ぐらいまで飛んでいったのかって、ちょっとついていけなかったところと、あと、もう一つは、愛という言葉が最後に出てきましたが、哲学において愛って、どういう定義がされてるのかというのをちょっと知りたいなというのがありまして、私の想像してる愛と、哲学の中における愛っていうものが、多分、違うんだろうなっていうところがありましたので、すいませんが、2 点、教えていただければと思います。

瀧：端的に民主主義が出てきたつながりは、飛躍してますので追ってません。ただ、藤山さんに補っていただいたように、古代ギリシャの民主主義はソクラテスを殺すわけですよね。そういうふうに民主主義というのは悪い政治性というふうに考えられてきたけれども、トクヴィルで、これがアメリカでは、うまく機能してるんじゃないかという形で見直されてくるっていうことがあって、その後の見直され方っていうのが、私に言わせると、atomism が、individualism になってくることと関わりがあるんじゃないかと思ってるんです。というのは、個々人が atom のように、自由で平等でっていうふうになってくるっていうような、自然における atom の在り方と、社会における個人の在り方っていうのが、古代中世から近代になってくるときに、これは論証できてないんですけれども、ものが精神的なるものから物質的なるものに変わるかのように、人も人格的な精神的主体、あるいは、魂としての存在ではなくて、物質的な形に似てくるような形で、人間が atom 化してくると。atom 化するっていう言い方は、20 世紀には、もうはっきりと出てくるわけですけれども、そういう連動を考えてのことなんです。

それと愛が、どう言いますかね。哲学ではどう定義されてきたかっていうのは、これは、また大問題で、例えば、キリスト教が博愛、仏教の慈愛、あるいは、ギリシャのエロースっ

ていうようなものは全て違います。でも、ここで私が言いたかったのは、例えば、資本主義が出てくるときに、ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で書いているように、もともとはカルヴィニズムの信仰。つまり、禁欲的なプロテスタンティズムの信仰があったから、すなわち、勤労の民衆の中に良心が呼び覚まされて、そういう中で人間として隣人愛を持って、勤労が神の栄光のために役立つっていう倫理観が出てくるわけですね。

そういう天職っていう言葉も、その辺りで生まれてくるんですけれども、その出自には、宗教的な、キリスト教的な、あるいは、プロテスタンティズムの倫理観があり、また、愛の問題が、隣人愛の問題があったし、民主主義のことだって、自由と平等っていうふうに二つ並べてはいるけど、もともとはフラテルニテっていう愛が自由と平等という離反する二者をつないでたはずなんで、そこにもキリスト教的な愛の問題があったに違いないし、そういう意味で、広い意味で愛っていうのは宗教の中には必ずある。キリスト教は、特に神は愛であり、愛の対象であるっていうぐらい、愛そのものだっていうふうに否定することもありますので、神なき現在、倫理とか、宗教っていうことを何に求めて分かりやすいかっていえば、当然、それは、われわれが身近なものに対して、自己愛もありますでしょうけれども、身近なものに対する、親子とか、家族とか、恋人とか、そういう愛っていうのは考えやすいし、それは、atom と atom であるところの個人がどうつながるかっていう。

その形の中での、愛っていうのは一番いい形じゃないのか。よく言われるのは、仁義の仁っていう字は、人が 2 人って書きますが、人が 2 人いるときの理想的な関係は愛ですから、仁というのはラブを意味しますね。そういうふうに、宗教とか神っていうことが遠い現在のわれわれにとっても、愛っていうことだけは、大変、自分のこととして考えることができるから、愛っていうのを、愛に生きるっていうことを人生の問題としても、よく生きるって抽象的な言い方って、善っていうのは、宙に浮くけども、愛は具体的ですから、日々の実践に関わってくることでもあるし、最後に残る言葉は愛だろうというふうに考えて、愛に生きるっていう結論にさせてもらいました。

藤山：とてもいい問題、質疑だと思います。他、どうですか。はい。

佐藤：文部科学省の佐藤です。本日は本当にありがとうございました。今、まとめで書いたという結論めいた、お話しいただいたんですけど、自分もお話を伺っていて、すごくそう思いました。プラトン哲学で、生物的生存への優位性というものを、お話があったと思うんですけれども、結局、効率性とか快適性っていうのを追求する先に科学技術があって、それは要は、いい生き方っていうところとは相反する、対局的なところにあるというお話があったと思うんですけど、そこから出た疑問というのが、現代の科学技術の追求とか、商品開発っていうのは、哲学的に考えるとしたら正しくないのかっていうところに、ちょっとふと思ったんですけれども、ただ、一方で、現代、今日のよく生きることが愛だっていうふうなお話

なのであれば、愛ある科学技術の追求とか、愛あるデモクラシーの追求というのが、是なのかなと。

個人は原子か単子かって問いたいっていうお話も最後のほうであったと思うんですけれども、考えるものが単子なのであれば、その愛ある科学技術の追求とか、愛あるデモクラシーの追求っていうのは、知性を持った単子として、人間がまさに集合体として愛ある知性を持って民主主義、科学技術を確立するっていうことが、多分、われわれ、現在人類に課されている使命なのかなと思うと、特にグローバル化において、一方で多様性っていうのもあるので、われわれ、例えば、日本人にとっての愛が、中国人にとって、アメリカ人にとって、欧州の人にとっての愛と言えるのかとかっていう問題にも、多分、直面してくるのかなというふうにもろもろ考えて、結局、答えとしては、愛ある集合体としての社会活動の確立というのを、どう成し遂げるかというのが、多分、われわれ、現代社会に生きる人類に課されている使命なのかなというのは思いました。

あと、もう一つ。在らぬものが在るっていうお話が、一番最初のほうであったと思うんですけど、まさに、この空虚っていうのは、日本でいうと真言宗の、例えば、色即是空、空即是色っていうところとも、相通ずるものがあるので、そういうものを、元来、ずっと、ソクラテスよりずっと後ですけども、日本人がずっと宗教観として持っているものみたいなのは、日本から発する愛ある科学技術とか、民主主義の中に反映することが仮にできるのであれば、それは一つの新しい可能性を生み出すものであるかなというふうに思いました。ありがとうございます。

瀧：ありがとうございます。よくまとめていただいたと思います。しかも、ご自身で科学技術のこれからの在り方を、愛ある科学技術という形で肯定的に捉えていただいて素晴らしいと思います。逆に、動機として科学技術を推進するのが、愛によるのではない場合っていうのが、当然、考えられるわけで、つまり、科学と技術が手を取り合って動き出すのが、第1次世界大戦の辺りの軍事的なものを開発する。兵器の開発っていうところで、科学と技術が手をつなぐっていうことがあるし、それに資金を投じて、つまり、国策としてっていうことが愛の力によって行われているのかどうかっていうのは、常に考えておかなければいけない恐ろしいことですし、例えば、国策でなくて、むしろハンセン病の方がいて気の毒だと。手を差し伸べたいと。だけど、科学の知識がなければ、うつるのではないかとか、そういう恐ろしいような医学の知識もなしに、愛の力で立ち向かうっていうこともあるけれども、今日では、それが科学のおかげで、安全な形でデボラ出血熱もそうですし、いい方向に動きますですよね。だから、この科学技術というのが、愛をもって人類の幸福のために使われるっていうことは、本当に素晴らしいまとめだと思います。

あと、色即是空っていうのは、あるものが、ないものがあるっていうことと同じかっていうところは、ちょっと考えさせられますね。それは、矛盾じゃないかっていう。つまり、論理的に矛盾してるかどうかっていう意味でいうと、色即是空っていうのは、矛盾というより

は、矛盾的な自己同一というか、即非の論理っていうのがありますけれども、A は A でないから A であるっていう、アリストテレス以来の形式論理を全く無視して、どう言いましょうか。同一率とか、矛盾率とか、排中律っていうのがありますけれども、排中律を反転させたような形での即非の論理っていうのが、仏教の中では、心は心でないから心であるっていう言い方で言われていて、これは西洋の論理的な展開とは、もう一つ、違って、龍樹ですね。ナーガールジュナがテトラレンマっていうことで展開した東洋の論理。四つのレンマっていう、ジレンマは二つのレンマですけども、四つのレンマっていう論理を日本の鈴木大拙とか西田幾多郎が、特に展開してるっていうことがあって、それは原子論の中で言われてるやつよりも、もう一段と高く深いものかもしれません。ただ、似てるっていう意味では、矛盾してるっていう意味では同じですけれども。

藤山：今の最後のやつは、今年 3 月ぐらいに、井筒俊彦さんの論文集で、『意味の深みへ』っていう本が岩波文庫から出たんですね。その中に東洋の思想の推移についてみたいなことで、何点か、イスラムも書いてあるし、真言も書いてあるし、デリダも書いてあるし、老子も書いてあるっていう世界の面白い本があるので、それは、結構、今、言ったポイントにつながると思います。それから、もう一つだけコメントさせていただくと、SDGs ってありますよね。SDGs っていうのは目標で、SDGs と科学って結び付けてれば、実は科学技術振興機構で、結構、やってるんですけど、目的にいきなりジャンプするって言ったって、なかなかつながらないよねと。その仕組みがいろいろですよね。SDGs をちゃんとやるために、どんな仕組みをつくれば科学の役に立つのかって、真ん中の仕組みなところを議論するのが大切だと思って、そこを考えるのは、十分、愛になる。

そうすると、ESG 投資なんかは、皆さんも会社の中でやられてるかもしれませんけども、そういう ESG 投資に対して、自分の会社が ESG 投資の対象になるっていうふうに動くっていうことは、実は愛もあるということになるのかもしれないとか、そういうふうに読み替えてみると、この問題設定も、結構、現実的になるのかなと感じました。森本さんでしたっけ？

森本：はい。NEC の森本です。少し感想に近いコメントになるんですけれども、最後のほうで、科学技術、市場原理、民主主義といったものが、現代において宗教的倫理のような支えるものがなくなってきているのだという話があって、愛に生きるという話があったんですけども、科学技術が発展するっていうことで、個人として物質的に何でもできてしまうというか、そういう感覚、錯覚というか、そういうものが強く入っていて、個人が物質的に神に近いようなところにいっているっていうような錯覚があるのかなというふうに思いました。そこを、もう少し精神的なところで、よりどころとして愛というお話があったんですけれども、私としては、そこは、平たく言うと相手の立場を理解して、その上で合意するところをつくっていくような単純な話なんですけども、それが供用なのか、愛というと愛なのかもしれないけども、そういうことを意識していかないと、偏りっていうのは止まらないのかなと

いうふうに感じました。すいません。ただの感想ですけれども。以上です。

藤山：ありがとうございました。瀧先生、何か一言。

瀧：そうですね。ちょっとびっくりしたのは、科学技術が物質的な豊かさを次々に与えてきて、人間が何でもできる神に近づくっていうふうにおっしゃったですね。それはどういうことなんでしょうか。具体的に、例えば、月に行ってとか、木星に行ってとかそういうことですか。

森本：そうですね。あくまで物質的な意味で、個人としての人間ができることがどんどん増えていっているという、そういう意味で言いました。

瀧：それでしたら大賛成で素晴らしいんですけれども、その場合は、言ってみれば、人としてできることが拡大してるっていうのは、身体が拡大していると。つまり、歩いていくしかなかったところを、早い乗り物に乗って、飛行機に乗って、広い世界も、ミクロの世界も次々に動けるっていうのは、言ってみれば、人間の体が拡大しているっていうことだと思うんです。ただ、それが問題なのは、その巨大化した身体に見合うだけの魂の大きさを人間は持っているだろうかといったときに、やはり、物質的な豊かさのために身体は大きくなっても、魂だけは今までどおりだとすると、そこに悲劇が、むしろ待っているのではないかっていうふうに思えるんですね。

極端な話が、核のエネルギーを取り出せるっていうことは、大変、身体が大きくなったっていう観点では、最大級のエネルギーですけれども、それを魂が追い付かないから、兵器として、人殺しの武器として使うっていうことは、科学の進歩、物質的な豊かさの中からは、それを止める力というのは出てくるんだろうかというところで、ここは、体の世話ではなくて、魂の世話をっていうプラトンの、ソクラテスの教えっていうのは、そういうところにあるんだと思うんです。

また、愛に関しては、相互に、お互いに相手の言うことを聞いてとおっしゃいましたが、それは、私としては素晴らしいと思うけれども、愛というのは、もう一段、上じゃないでしょうか。つまり、相手は自分とは考えが違うんだけれども、対話によって相互にお互いの立場を理解するっていうような次元のことと、愛の対象であるっていうようなときには、対立っていうのが初めから起きてないので、自分が自分である、相手が相手である。集団の場合は、閉鎖的な集団と、別の閉鎖的集団っていうのが相互に理解しても閉じた社会同士では、いつでも戦闘態勢に入れるような敵対してる状況。それは、その間に愛がないからで、もし、愛があったら、それが一対一であっても、集団対集団であっても、そういう反目から戦闘へというようなことにならないんで、宗教が教えている倫理感っていうのは、なんじの敵を愛しなさいということですから、それは、なんじの敵の言うことを聞いて理解しなさいってい

うことよりも、はるかに高いことを教えてくれてるんだと思うんですが。親と子の愛でも、子どもを親はどういう形で愛するかと。子どもの言うことを聞いてやるも何もあるんでしょうけれども、自分に照らしたときに、そこには一つの垣根のなさというか、そういうのがあるんじゃないでしょうか。愛というのは、そういう意味で私は使いました。

藤山：はい。他にいかがですか。はい。その隣。

吉田：東芝の吉田です。大変貴重な講演ありがとうございました。私もプラトン哲学の基本構造の図は、とても印象的でというか、すごく分かりやすくて理解が深まったんですけど、ただ、言葉だけを見ると、どうしても左側のほうが否定的な表現で書かれているような傾向に見えて、左側の生き延び原理っていうところが、科学技術の推進につながったっていうふうにあるんですけれども、科学技術がすごく推進した力強さみたいなのを左側に感じていて、シンプルが故に非常に力強くグローバルに広がっていった原動力になっているんじゃないかなっていうふうに、プラスの側面もあるように見えているんですね。

その辺は、どういうふうに考えられているのかということと、あと、この精神のところ、哲学が衰退してきたということで、これを人と人、魂と魂をつなぐものが愛だということであれば、この愛が広がる弱さというんですかね。スケールしにくい理由っていうのか、何かあるのか、それは価値観だったり、何か愛自体が広がりにくい要素っていうのは何かあって、それが故に哲学が衰退してるのかっていうことをちょっと考えていたんですけど、その辺について何かコメントがあればお願いします。

瀧：はい。生き延び原理という表現は、精神原理に比べて、また、ただ生きるっていう言い方が、よく生きるに比べて消極的、否定的であるっていうのはおっしゃるとおりで、実際、これは藤澤先生の用語をこのまま使わせてもらって対比してるわけですが、藤澤先生にしてみれば、プラトンの言うことを、彼の言葉を使ってまとめたので、プラトンは、こういう言葉で言ってると言っていいと思うんです。ですから、本当にただ生きるっていうことでよろしいのかと。生き延びさえすれば、体が延命すれば、それでいいのかっていうことを言ってるわけで、ソクラテスは死を通して、何のために死ねるかというふうに考えたわけですね。ソクラテスは、死を求める哲学を始めることによって不滅ですね。死ななかったですね。今でも生きてるから、ここでこうやってしゃべってるわけです。つまり、ここでやってるただ生きるっていうことは、否定できないというのは、いつの世でも多くの人々は、この左側の原理で生きてるし、左側を良いものとして考えてるし、従って、今日でも左側を推進している科学技術の方向っていうのは誰も反対しないどころか、大いに賛成してると思うんです。

ただ、そこでの問題は、結局、それは、なぜそうなのかというと、人々が本当にある、リアルであるっていうことが目に見えたり、手で触れたりできるものこそが存在しているし、リアルなものだっていうふうに考えてるからで、それはいつの時代でも目に見えないもの

は信じないっていうことがあるわけだし、証拠を出せ。それは、空間的に位置と、場所と、それは確認できるっていうことであるし、それは数字に置き換えて計算できるっていうことだしっていうふうなことを考えてくると、日常の生活においても、そして、また、多くの人々が検証可能性として、そのことの真偽を実在的なレベルで問うことができるっていう意味でも安心してそちらに向かってるわけです。でも、プラトンやソクラテスが言ったのは、それは体の話だろうと。物体の話であり、身体の話なんじゃないのかと。身体に、体の世話をするってことは、もちろん、大事なことで、それをしなければ生きていけないけど、動物だって体の世話をして、最も快適に子孫を増やして、種族を伸ばしてるわけですね。

そうすると、人間っていうのは、動物と同じようにただ生きているのだろうかっていう根本問題になってくるわけで、そうすると、人間っていうのは、私っていうのは、目に見える体が私なんじゃなくて、この体を動かしているところの、それ自体は目に見えない魂。つまり、ギリシャの考えは、体っていうのは他から動かされて、自ら動けないもの。魂っていうのは、自らを動かすことのできる。そして、他のものを動かすことができるものですから、そういう意味での、魂としての目に見えない、そういうものを私と考えて、それを世話するっていうことは、魂の良さを、卓越性を求めるっていうことは、これは倫理的な価値そのものなので、迫害の問題が出てきたり、いろんな徳っていうのが出てくるけども、全てそれは魂の良さの性質を言ってるわけなので、そちらを、魂の卓越性を望むっていうことが大事なのではないかという問い掛けに対して、これは、私はやはり、生きてるときは、体を安楽に、快楽を求めていきたいっていう人々のほうが、いつの時代でも大多数だから、今でも大多数だし、そのようであるんだと思います。

藤山：はい。磯部さん。

磯部：すいません。ありがとうございます。日産自動車の磯部です。ヘレニズムとヘブライズムのところ、ちょっと一つ伺いしたいんですが、そもそも古代ギリシャの思想として、よく生きる。善の優位の思想であったものが、なぜこの中世以降、善に対する存在が優位になるっていう、天と地がひっくり返るような大きな逆転をしてしまっているのかっていうところが一つよく分からなかったのと、むしろ、キリスト教とか宗教そのものが善優位のことを教えているものなのじゃないのかなと思うんですけど、宗教があってこその、こういう存在論が優位になってしまったのか、そこら辺をお教えていただきたいなと思います。

瀧：まず、第一は、存在に対する善の優位の思想が、善に対する存在優位の思想に取って代わられたっていう意味ではありません。二つの伝統が並行して、今日まで続いてると。ただ、二つの伝統は相互に干渉し合いながら今日まで来てるんだけれども、もし、その二つの、つまり、古代ギリシャ以来の哲学的伝統と、ユダヤ、キリスト教の宗教的伝統の本質的な部分を図式的に対比すると、こういう違いになるっていうことをトレモンタンは考えて言って

るわけなので、決して歴史的推移として左が古代で、右が中世、現代と書いてあるから、古代から中世、近現代へっていうふうに矢印で左から右へ動いたって読まれたとしたら、私の書き方が悪かったので、古代ギリシャの思想が今日に及んでいる伝統だし、ユダヤ、キリスト教のほうは、当然、紀元前6世紀以後の古代ギリシャの思想が、1世紀くらいに、キリスト教の思想の中に入ってきて、具体的には、アウグスティヌスがプラトンの思想を入れて神学を立て、トマス・アクィナスが13世紀にアリストテレスの思想を入れながら神学体制を立てるっていうような形で進んできたので、相互に干渉し合いながらも、しかし本質的なところで驚くような違いがあるということをここでは言いたかったので、よく西洋の思想は存在論というふうに一言でくくってしまうんだけれども、ギリシャの思想の中には、最終的には存在の彼方に美そのものが輝くとか、善のイデアがエペケイナと。彼方。ウーシアース。存在の彼方の、存在を超えているところの一者っていうのを立てているのに対して、ユダヤ、キリスト教の伝統では、われはありてあるものだっていうふうに、存在っていうところから、神と被造物の関係が、存在の類比っていう、アナロギア・エンティスっていうことで、神と人との関係を考えてきた伝統があるわけなので、これは存在論としてくくることができると思います。

書いてしまうと、そうは思えないっていうふうなご意見あるかもしれませんが、しかるべきテキストの証拠を挙げながら、トレモンタンはこのような区別をしてるし、その他にエティエンヌ・ジルソンの考え方もここに入れたり、たくさん参照してこういう表を作ってます。

磯部：分かりました。ありがとうございます。

藤山：結構、難しいところですね。どうぞ。星野さんかな。

星野：JXTG エネルギーのホシノです。先ほども質問が出てるコメントの中で、科学の軍事技術としての利用が、魂としての人物の成長が、身体としての人物の成長に追い付いていないっていうコメントがあったんですけれども、そもそも魂と、科学技術が進展してるのは間違いないと思いますけど、古代から魂としての人物っていうのは、成長してると言えるんでしょうか。それとも、むしろ、退化してるっていうお考えなんでしょうか。それと、それをさらに、科学技術の発展にどんどん追い付いていかないと、よりそういうことが起きるというふうに考えると、より魂としての人物を成長させるためには、哲学の発展だったり、哲学の教育だったりと、人物を成長させるためには、どういうことが必要とお考えになってるんでしょうか。その2点について教えてください。

瀧：ご質問の中に答えが入っているように思いますね。つまり、魂は成長してるんだろうかっていう質問の中には、分からないと。つまり、魂は見えないんだし、そもそも、そんなものがあるのかどうかも分からないから、成長してるのかどうか目に見える形で、手に触れる

形で、あるいは、数字で挙げるような形で表せないだろうということなんだと思うんです。ですから、そういう質問が出ること自体に魂に対する、魂の不在。これは科学では、心とか魂とかっていうものは問わないというか、意識の問題は科学の、サイエンスは意識の問題をかっこに入れているのですよ。従って、この魂そのものが磨かれて、体が大きくなるのと同じように成長してるかって言われたら、当然、してないと思いますから、人類は今、巨大になり過ぎた身体、そして、求め過ぎた物質的豊かさの中に押しつぶされて、そして、核戦争というようなことを、軍事的な外交カードにしながら戦い合ってるっていうことは、いつ滅びるか分からないっていう、そういう危機的状況なので、魂は決して成長していないどころか忘れられている。

ただ、本当にそういうことなのかっていうと、例えば、きょうのアクティブラーニングの話に戻りますけど、六条御息所が出てきて、葵上を呪い殺すっていう魂の力っていうのは、当時の人々は信じてたわけで、つまり、『源氏物語』っていうのは、日本の中でも誇るべき霊魂論なんです。魂論なので、病を治すっていうときには、医者だって漢方の医学の本がいくらでも入ってきて、科学的な治し方、いくらでもあったのに、日本の当時は天皇だって祈祷師によってもののけを払う、ついてるものを払うということで治ると思ってたわけですね。それが今となっては、全くの絵空ごとというか、つくりごととして、リアルな恐ろしさもなければ、現実感も持てないっていう状況になってるっていうことは、本当に人が魂とか心とか、そして、命そのものも忘れているというふうに思えますね。スピリチュアルっていうことの、大和言葉で言うときには魂と心と命だと思うんですけれども、これが例えば、生物の研究っていうことになると、命を持った生き物を物質的な形で研究するわけだし、精神、心の研究も、脳という肉体の物質的な運動を研究するわけで、そういう意味では、魂が大きくなるどころか、魂は忘れられてると。

しかし、実際にはお墓参り行きますし、また、初参りもしますよね。あれは何をしてるんだと思われます。惰性？　習慣？　でも、なんで、そんな合理的でないことをやってるのかっていうところを反省するっていうことはできるんじゃないでしょうか。自動車に、交通安全のお守りを付けてらっしゃいます？

星野：付けてます。

瀧：なぜでしょう。そういう問題だと思うんですね。

星野：ありがとうございます。

藤山：はい。

城戸崎：キヤノンの城戸崎です。貴重なお話ありがとうございます。今回、ちょっと感想っぽくなってしまうんですけど、科学技術がどんどん進化してきて、そうすると、効率性とか利便性とか、そういったところがどんどん進化する中で、生命科学とか原子力とか、いろんなところで技術を進化させるだけでは、もしかしたら、間違えた道に行ったりとか、判断を誤ってしまう可能性があるんだなっていうのを、きょう、すごく感じたんですね。そうしたときに、先ほど、愛の科学とかおっしゃっていただいたんですけど、愛の科学技術っていうのは、一体、どういうものなんだろうなと思いながら、それっていうのはSDGsとかで持続可能な社会をつくるとかいうふうなことをいって、世界全体的の共通の目標を立てるのにプラスして、そういったことを考える教育なり、そういったところを、人間自体のベースに、そういうことを身に付けるようなことをやらない限り、大多数の人が効率性とか、そっち側をいってしまうので、そういった共生っていう概念の考え方を世の中に浸透させるための仕組みっていうものが、すごく大事だなっていうふうに感じましたっていうところです。

瀧：ありがとうございます。本当にそうですね。考えないといけないことだと思います。そして、その科学技術っていうの、愛を持った科学技術っていう考えがありますが、もう一つは、科学、episteme が、技術、techne と一緒になったっていうふうな説明が可能と思うんですけども、この techne には芸術っていう近代的な意味がありますですね。まさに芸術という技術の存在は、能率とか効率っていうのとは違った便宜でつくられてるんですよ。

例えば、ベートーヴェンの交響曲を、効率を考えて休止符を全部なくしてみたらどうなるかとか、あるいは、2倍速、3倍速で音楽を聴くのかっていうふうに考えたときに、それは能率とか、効率の問題では全くない。そういう技術の在り方が示されてると思うし、そういうのを教えるのはリベラルアーツ。そして、科学者が出てきた、ルネサンスに出てきたときには、ニュートンなんか魔術師みたいなもんだったけど、レオナルドこそは、まさに科学者でしたよ。科学の目で自然を見て、それを絵に描く技術を、つまり芸術を持っていたっていうことは、そこでは価値としても有用性ということではなしに、美しさというようなことが出てくるかと思うんですね。真っていう、自然の真の在り方っていうのもあるけれども、美しいっていうような、美の価値っていうのは、まさに、芸術は昔からそれを普遍的なものとして、つまり、どの人も、いつの時代でも分かるような形でつくろうとしてきたんだと思うんです。

城戸崎：それは心の豊かさとか、そういったことをイメージしてるんですかね。今、おっしゃっていただいた美というのは。

瀧：いえ、心の問題に関わってるわけだけれども、つまり、音楽を聴いて心が洗われるような、豊かになるようなっていうのは、心の、魂の問題だけど、それを可能にしている芸術家の技っていうのは、物質的なものに乗っかってのことだし、まさに技術がなければ、そうい

うふうに人を、心を揺さぶることもできないわけですから、ここは科学技術も、それと似たような立場にあり得るわけで、科学技術が人の心を、そのような形で感動させてくるっていうことが、当然、起こってきてるわけだし、起こってほしいわけで。

城戸崎：分かりました。ありがとうございます。

藤山：他に。そろそろ課題図書のほうから出てきた質問でも良いので、2度目の人にも解禁しますので、どうぞ。はい。齋藤さんかな？

齋藤：日産の齋藤です。ありがとうございます。正直、かなり深い議論というか、自分の中であまり消化しきれてないんですけれど、よくではないんですけど、たまに、人間ってなんで存在するのかなと思うこともあると。僕自身、エンジニアですけど、例えば、科学の進歩で、脳科学の進歩で、意識ってどうやって創出されてくるのかなっていうの、その一帯は解りかけてきたりとか、量子論とかからすると、今まで絶対的な点っていうのはあるとされてたものが、それはないと。全て動いているとかですね。宇宙を。まだ全然分かってないですけど。そんな中で一生懸命、科学を通じて、そこにあるもの、見えないものと言えるのかどうか分かりませんけど、それは一生懸命、規定しようと、ずっと挑戦してきているというふうに理解しています。

一方で、きょう、最後におっしゃった、まさに、ちゃんと考えて。魂をもって考えて、愛という言葉ですけども、そういうものを追求し、探究し続ける。そこの大事さというか、物質的なところと、それ以外のところ。これが本当にどうやって処理されていくのか、自分の中で全く消化できませんけども、これは、私たち人間が存在する意味に結び付くのかなと、きょう、うかがっていて、最後、愛というところで締められて、そういうことなのかと思いました。

本を読んだ中身で、全然問いまでいかなかったんですけど、私が一番最初のほうで、第2章ですかね。悟性と直感との違い。悟性は不動から出発して、並置されたものを、不動をもって運動を、もとでつくり上げていくと。直感っていうのは、そうではなくて、運動から出発して、その事象そのものをスナップショットのように切り取ったものであると。これ、どちらが良いとか悪いとかではなかったと思うんですけども、本当にその真理に近づいていこうとすると、ここでいうところの直感をきちんと理解をしてというか、受け入れて、そういう取り組みを哲学の中に受け入れていかなくてはいけない。そういうふうに私は読んだんですけれども、ここが大きな変化になったのか、西洋のものの考え方の中で、何か、これが一つ、大きな変化だとか、そういうことなのかどうか、もし何か補足のご説明がいただければなと思いました。

瀧：はい。これもいろいろ言っていただきましたですね。最も根本的なのは、なんで私は存在しているのかというような問題は、われわれはどこから来て、われわれは何者であって、われわれはどこに行くのかっていう人生の根本問題ですよね。それは、ここで言いますと、プロティノスの図式を出したときに、これですけれども、一者から出てきて、また出てきたもとへと帰るというような存在論的な発出、還帰構造をプロティノスは考えているんですが、これが、精神と物質っていうふうな言い方で言うならば、最初に精神が出てきて、そこから物質がさらに出てくるっていう、こういう考え方なので、今と逆ですわね。つまり、今の科学がとる立場は、物質っていうのが、まずあって、唯物論ですから、あるのは物質だけですから、それの運動によって心なるものとか、精神なるものとか、あるいは、魂と言われるものが考えられてるんだっていう説明になっているけれども、この絵は誠に逆で、精神の中に身体がむしろあるわけだし、時間の中に空間があるっていうような、こういう図式です。これは、プラトニズムの総決算が、こういうような形での、どこから来て、どこへ行くかっていう一つの、彼らの答えです。西田幾多郎だったら、そこから、そこへっていう。そこっていうのが、一番上の一者とか、善一者っていう。これ、絶対無っていうふうにいうこともできるし、無とか、あるいは、空とかっていうふうにいうこともできるような、そういう資源にして、究極っていうようなことかと思います。

それで、いろいろ言われたんですけども、量子力学の話なさって、ハイゼンベルクが出てきて物理学が新しく一歩進めたっていうときには、非常に驚くべきことに、ハイゼンベルクはデモクリトスの原子論じゃなくて、プラトンのティマイオスを読んで、プラトン的な意味での原子の考えに触発されて、量子力学をつくったので、唯物論的な側ではない量子力学というのが開けたんだけども、実際には物を細かく砕いていって、最小単位で物質的に考えるっていうところは動かないので、これが一言で言えば、科学っていうのが、物質を研究対象にしてるんだと。

物資の側から精神を考えるっていう、この物質を考えるっていうところは、全く哲学と逆で、哲学の研究対象は精神の本質を考える。心の本質を考えるということなので、ここでも先に知性というのが出てくるっていうのは、そういう意味もあります。より問題なのは、物質的なものしかない。あるいは、精神的なものしかない。あるいは、両方あって、これが連動してるというか、相関関係にあるっていう二元論の物質的なものと精神的なものを、どうつなぐかっていうことが、デカルト以来の哲学の中では、一番大きな流れなので、ベルクソンの話をするならば、ベルクソンは、物の側から心を説明するのではなく、心がまずあって、それが物を説明するのでもなく、習慣的なところから、両方に動いていくような説明の仕方をとってるので、それが真ん中に持続の哲学ですけれども、持続っていうのが緊張してくると、精神になる。

それが外へと緩んでくると、外へとが広がると延長としての物質になるというように、精神の側へ緊張のレベルが高まるか、物資の側へ緊張が緩んで、弛緩するかっていうのが一元論的に考えられるということなので、ベルクソンの場合は唯物論でもないし、唯心論ってい

う心だけがあるっていう立場でもない。実在論というのと、観念論っていう対がありますけれども、その中間から出て、どっちにも行けるような思想を試みてる。でも、科学は明らかに、依然として物質を対象にし、その科学の持っている能力は、知性、アンテリジャンスという知性だし、それの作用は、認識作用としては分析。それに対して哲学は、直感という能力によって対象のただ中に入るっていうわけですから、一つになってしまうっていうところは、分析が対象の周りをぐるぐる回りながらも、対象と一つになれずに、ある点から見る他ない。ある表現方法にあってそれを記述するしかないという、そういう相対的な認識にとどまる。これが科学的な認識だけども、直ちにその中に入って、そのものと一つに、同じ鼓動を生きるっていうような、絶対的な認識が可能であるとすれば、それは、記号によらない学問としての形而上学なんだと。その能力を直感というふうにベルクソンは説明してると。こういうことです。

齋藤：ありがとうございます。

藤山：どうでしょうか。はい。どうぞ。お願いします。佐倉さんね。

佐倉：三井住友銀行の佐倉でございます。非常に私も、なかなか自分の腹に落とすというか、なかなか理解を深めることが難しい中で、すごく現実的なというか、自分の日々接してるところにイメージを落としながら考えないと、なかなか難しいなと思ったりもしていたんですけれども、課題図書ではなくて、きょうの講義の話なんですけれども、例えば、プラトン哲学の基本構図の二つの対立の図っていうのがあったんですけれども、あれは個人についてのお話というところもあったかと思うんですけれども、例えば、私なんか経営企画という所にいる身からして考えると、例えば、会社とかって、そういう個人の集合体みたいなものにも、こういうものって当てはめて考えることができるのかなとか思ったりもしまして、よくわれわれの、特に言うんですけど、企業って生き延びること。永続させることが目的であってとか、生物的生存への有効性とか、数字で表されるものは、KPI とか、そう求めているっていう意味で、非常にわれわれの今の企業経営って、左側の生き延び原理に近いものがあるなと思いつつ、一方で、先ほどお話があった SDGs とかっていうのは、結構、右側の話のようでもありますし、例えば、ステークホルダーも株主だけじゃなくて、従業員とか、社会とか、顧客とかっていうところの幅広いステークホルダーを見ていく。

最近、われわれの中で話題になったのが、アメリカのビジネスラウンドテーブルっていう日本でいう経団連みたいな所がコーポレートガバナンスみたいな話で、今までは株主を第一のステークホルダーとして見ますと言っていたところを、これからは株主だけではなくて、顧客とか、従業員とか、社会とか、マルチステークホルダーを見ていきますっていうような方針を、結構、大きく変えたっていうことで話題になってるんですけれども、そういう意味で考えると、企業経営っていうのも、やや左の生き延び原理から、少しずつ精神原理と

いうんでしょうか。逆にいうと、愛ある経営みたいなものに移行しつつあるっていうような考え方もできたりするのかなとか思ったんですけれども、そういうことに関して、こういう考え方でいいんでしょうかっていうのをお聞きしたいと思いまして。

瀧：ありがとうございます。ご自身のリアルに感じられるところに場面を持っていかれてっていうのは、おっしゃるとおりで、そのとおりだと思います。私の議論の中で言いますと、このプラトンの構図は、人が１人でよく生きるか、ただ生きるかっていう話をしてるわけですけれども、きょう、話に持っていったのは、原子っていうところから個人っていうところに来て、原子が自然の中で複数離散集合して、自然の運動が起きているのと類比的に、社会というところで複数の個人が相互に関わり合いながら、やはり動いているわけですが、そういう類比でいうと、会社というような組織も個人の集合としては一つの小さな社会だし、その社会の規模が、例えば、国っていうような単位にもなり得るでしょうし、人類社会っていうレベルで、個人個人の相互関係の中で、どういうふうに人類の社会が動いていくかっていうことも考えられるっていうことは、会社の組織を、リーダーが、トップが引っ張っていくのと全く同じような形で、人類社会を特権的な聖者とか英雄が引っ張っていくっていう構造が、当然、可能であって、それぞれ個人なんだっていうところが、大変、問題だと思います。

つまり、発案者が複数の中に責任が解消してしまうようなものなのか、それとも、個人が初めてそれをやるっていうことがあるのかっていうところで、よく天才っていうのは社会がつくるものなんであって、個人が何かをするっていうことはできないっていう説明の仕方がありますけれども、きょうの話で言うと、最終的には会社なり、あるいは、大きな社会なりの集団の中でも、その atom としての個人がよく生きるっていうことを始めることによって、それが伝染して他の人々もよく生きるようになって、私に言わせれば、それは愛というものが広がっていく社会だと思うんです。だから、個人が他の他者に対して、愛を示すようなことは伝染していくわけで、そういう愛ある会社もあるだろうし、愛ある社会があると思うんですが、それはとても考えさせられますですよね。そういうふうに私は思います。

藤山：あとは、クリエイティングシェアドバリュー。CSV。これはもともとの CSR の考え方と全く違いますよね。リスクマネジメント的な世界から、社会の共有によって、逆にいうとよく生きることが長く生きる、生き延びることにつながるんだっていうふうに価値観を転換させて、理屈から言うと、よく生きることが長く生きることですよっていうふうにマイケル・ポーターが言ったことによって文になったわけですね。日本も三方よしっていう言葉があって、マイケル・ポーターにある人がそれを言ったら、私の考え方がオリジナルじゃないって言うのかっつって怒ったらしいけど、それは置いといて。今、先生がおっしゃった愛という部分だと思いますね。それはね。そのことを、どういう一歩として理念を実現、CSV っていう理念を実現するのか。いき過ぎた実現はないのかとか、その辺のところに、十分、経

営者としての判断の余地があって、それはどのようなバックグラウンドでもって、自分の核心として経営に生かすのかっていうのは、まさに生き方の問題だというふうに思いますね。

はい。どうでしょうか。他に。先ほどの星野さんと、齋藤さん、魂の話。物理学によって生物学を解明しようとしたシュレディンガーだとかっていう人たちが、みんな自分が科学者だと思って生物に行ったら、いや、科学者って物理学の世界だっつって入っていって、ある程度のことは分かったんだけど、最後の最後、どうしても分からないと。その残されてるものが、彼らにとって大きかったんですよね。それは、やっぱり魂の存在じゃないかと恐れおののきながら、みんな本を書いているような感じがしますけどね。

物理学の世界は、先ほどおっしゃったように、量子力学に立って、それをも揺らしているわけですよね。そうすると、東洋の哲学に、またみんな近づいてるみたいな感じがちょっとあるっていうのが、今だと思います。それが極端に走っちゃったのが、ポストモダンと言われてる、一流の中の変な方向です。それを、また否定するのに時間がかかってっていうふうに、20 世紀の後半っていうのは、哲学会が、ある種の混迷をしたっていうこともあるかもしれないですね。いかがでしょうか。他に。梅原さんは、まだ、ご発言されてないかな。

梅原：今日は最後になっちゃいました。JST の梅原です。できるだけ、きょうは最後の最後まで粘ろうと思ってたんですけど、バレてしまいました。私、多分、とんでも発言しかできないのでお恥ずかしい限りなんですけども、いろんなかたがたが言語化するのがすごいなと思って聞いてたんですね。私が今、至ったところって、多分、私は人間じゃないんじゃないかっていうところでして、つまり、すごくとんでもなんですけども、私っていうものが物質から離れたときに、それは人間っていうカテゴリにする必要がないんじゃないかという気がしてきていて、そうすると、私がもともと思ってたやおよろずの神とか、なんにでも宿るっていうところ、東洋と西洋で全く違うものと思ってたものがつながってくるような気がしたんですね。

何を愛するかっていうときも、人間を愛せよってすれば、多分、あらゆるものが人間というふうに捉えることもできて、必ずしも、この地球って人間だけが生きてるわけではないし、生き物以外のものもあったりするので、全てに対して愛をってなったときに、結構、人間って何だろうなというところに疑問がいってしまっているんです。ていう感じで自分でしゃべってて文字起こしって意味が分かるかなって言われると思うんですが、ただ、科学技術が愛あるっていうときには、恐らく、そういう狭い意味での人間だけで捉えちゃいけないんだろうなというふうには思っていて、SDGs とかいろんな標語があるにしても、多分、そういう枠を超えたような考え方をしなきゃいけないのかなと思ったのが、皆さんの発言を聞いて、今、思っていることです。あとは、グループ A で事前に書かせていただいた二つ質問があるんですが、ちょっと今、思ったことだけ話させていただきました。

藤山：グループ A のやつも続けても。

梅原：よろしいですか。そうしましたら、二つ書かせていただいたんですけれども、一つ目が、ある意味、3 人ともこれが聞きたいなということでした。ベルクソンの中で、点っていうものが議論されて、直線というものがあって、きょうのお話でも、確か、ちょうど先ほど瀧先生がおっしゃった、外側からいろんな見方をしても中に直接は入らない。そこには何か直感って別のものがないといけないっていうところを、今の世界で考えると、多分、データでいろいろ考えて、ビッグデータっていうものがあるんですけど、もしかしたら、ここにも限界があるっていうことを示唆しているのかなと、こういう解釈というので、ある意味、通じているのか、100 年たった今でも通じるのかっていうところが質問 1 です。2 のほうは、大和言葉のほうで最初に導入していただいたように、結構、言葉って非常に大切なもので、翻訳をしただけで、随分、変わるような気がするんです。それが哲学に対して、どのぐらい影響を与えてるか。これ純粋な疑問として示させていただいてます。という、非常に脈絡ないんですけれども、よろしいでしょうか。

瀧：三つ質問をいただきまして、最初の質問が一番難しいですね。私は人間ではない。つまり、身体を離れたときの魂としての私が、果たして、人間と言えるかどうかっていう問いですね。これは、もし人間というものを目に見える、つまり、顔もあれば、手足、そういうふうに捉えるならば、身体を離れてしまえば人間ではありませんですわね。だけども、ここでより問題なのは、魂としての人間っていうものを、もし、考えるとすれば、しかもそれが個人、私っていうふうに考えられるかどうかっていう問題になってきて、これが二つの立場に分かれて、ギリシャの伝統だと、それは身体を離れると、世界霊魂とか。

つまり、私っていう人間の個人のくくりを越えて、世界で霊魂のレベルとか、さらにはもっと上がったら一者へと帰ってしまうわけですけども、ユダヤ、キリスト教の伝統では、私の魂が神によってつくられた以上、身体を離れても個別性が保持されていると。なぜならば、個性をつくっているのは肉体という物質性ではないからっていうのが伝統なんです。これは文化とか、地域によっていろんな考え方が確かにあると思いますけど、一つ考えられるのは、輪廻転生の問題ですね。魂が体から抜けたときに別の生き物になるのか、それとも、また人間なのかっていうのはギリシャにもあるし、仏教にもあるし、いろんなところであるからとても考えてみられる意味があると思います。

あと、二つ目で、点と直線っていうことでビッグデータのお話になりましたけれども、結局、ここで言われているのは、運動っていうようなものは内側から捉えれば、分けることのできない一つの不可分のものですが、例えば、手を挙げるときに、はいと挙げるわけで、一つの分けることができないんだけども、それは運動が経過した空間、軌跡と考えるならば、その軌跡は無数の点に分配することができるということで、一つのものが、生きられた一つの不可分なものが、その運動の残した空間では、点として、あるいは、区切っていったら切

りがなく分けられるっていうことだと思うんですね。ですから、分析的見地から得られた、無数のデータっていうふうにいってもいいけれども、そういうのを集めてもとの運動が復元できるかっていう、そういうことになって、ここが不可逆性っていうのが問題になると思いますね。

つまり、分析と直感の話になりますけれども、直感を得ることができれば、分析していくらでも複数の数多くの要素に分けることができると。だからといって、いくら多くの要素を寄せ集めたとしても、もとの一つに戻るかっていう。特にそれは生き物だと、例えば、カブトムシっていうのを考えてもらった場合に、カブトムシの生きて動いている一つのものを、科学が分析する。手足をもいで、あるいは、あらゆる器官をメスを入れてちぎると。それはいくらでも分けることができると。ただ、分けたものを一つに集めてもとの生きてるものに戻すことができるかっていう、こういう問題で、不可逆性があるから、1なる直感から無数の分析へはいくことができる。

生きた時間としての直感から空間の中にばらけて分散する意味でのデータは無数にあるかもしれないが、空間というさっきのプロティノスの図だと、一番下の所から上がっていけるかっていう、こういう問題がそこにあって、ここは、ベルクソンは直感から分析へはいけるけれども、分析から直観へはいけないっていうふうに言ってるし、そういうのは、例えば、鈴木大拙なんかは、日本的霊性の中で、霊性、スピリチュアリティーからは分析にいけるけども、分析からスピリチュアリティーにいけないという全くベルクソンと口をそろえたような、そういう不可逆性のことを言ってます。

あともう一つは、言葉の翻訳の問題は、確かに intellect を悟性って訳されたら分からないですよね。しかも、悟るっていうような。しかも、より問題なのは、悟性の悟っていうのは、ドイツ関連論の中でフェアシュタントに対して、悟性っていう訳語が与えられてきた伝統が。フェアヌンフトを理性と訳した伝統があるので、そういう意味でもドイツ哲学と、フランス哲学の間で悟性っていう言葉が、あるいは、英米系の哲学の間での使い方がずれてくるっていうのは大問題で、それは悟性だけでなく、いくらでもありますですね。ライプニッツの訳語なんかひどいものなんで、他の正規のフランスの人がやったら、全然違う訳語になってる。

でも、それは大丈夫なんだと思うんです。それは、訳語の明治以来の伝統的な体験あるだけではなくて、テキストが複数の概念の関係によってはおりなされてるので、一つの訳語が何であっても、例えば、悟性って訳そうと、英知って訳そうと、知性って訳そうと、それは直感との関係で、こちらは分析なんだけど、こちらは直感なんだっていうような関係性を見てもらったら、訳語がよく分からなくても、全体として何を言ってるかは、星座みたいなもので、北斗七星を見てもらったときに、七つ星が並んでた。その星のそれぞれの意味は全く分からないと。でも、全体の配置、それぞれの関係からすると、ひしゃくじゃないかって分かるんですね。そういう分かり方が言語の使用っていうことで翻訳を通しても可能だから、要するに、キーワードとキーワードの関係性さえ、しっかり見失わなければ、何とか紛らわ

しいけども切り抜けられる。河野先生の訳は、メタフィジックを哲学って訳しちゃっていいんだろうかっていうのがあったり、ということはあるんですが、しかし、基本的には、ベルクソンの言葉では、言葉での解決を捨てたときに、ベルクソンの哲学を始めたという。

つまり、哲学は言葉の遊びではないっていうふうにはっきりと言っていて、ということは、哲学というのはシンボル、象徴的な記号としての言葉なしに進もうとする学問であるっていうふうに、言葉なしに済まそうとする学問だっていうことの意味は、言葉を超えた経験そのものに直感によって帰っていくと。持続のただ中に身を置くっていうふうに何度も出てくるのは、直接体験。それは言葉以前、主客未分。そういうところに、まず、身を置いて、そこを生きてみるところから、かえって、そこから言葉が出てきて、だからこそたくさんの伝説が出てくるんだっていう、そういうことだと思います。

藤山 : ありがとうございました。さっきカブトムシの話も出てきましたけど、パウルが同じことを言ってますよね。ばらばらにして調べても、それは生物学じゃない、死物学だって。だから、絶対昆虫のことは分からない、ばらばらにしてもということをパウルが言ってるんですけど、そういう感じかもしれませんね。きょうは、実は、オブザーバーというか、ゲストで東大の准教授の伊達先生に来ていただいて、伊達先生、宗教の絡みで、13 番目に解説の所に書いてあるお話を依頼してるんですけど、きょうのお話の感想なり、何かこの場の雰囲気のご感想なりを頂戴できたらありがたいなと。

伊達 : いや～、ここでこういう話を振られると全く思ってませんでした。宗教学っていうのを勉強してきたんですけど、あれなんですね。瀧先生のお話を伺って、美学、今道先生。文学部の中で美学が一番崇高で宗教っぽくて、宗教学っていうのはかなり俗っぽいっていう言われ方をしまして、私は、きょう、プラトンので二つ対比があって、皆さんからもたくさんコメントがあった基本構図ですけど、これなんか見ると、私、結構、最近、どうやって生き延びようかなって、こういう時代を。なんて考えてたりして、割と左側の立場かなと思ったり、ただ、こういう場ですから、ある種、ものすごく、カリカチュアをしますと、左なんかが弱肉強食のというか、社会に出て働くっていうのは、こういうことだみたいな、現実はこうだみたいな。

右のほうっていうのは、割と本当に、非常に理念的な。ただ、古い形の象牙の塔みたいな、大学なんかもそういうことがあったかもしれませんけど、今、こういう場があるっていうことは、ある種、この二項対立だけ。もちろん、モデルで考える分にはいいと思うんですけど、ある種の接近性っていうのがあると思うんですね。そこで私なんか、本当に皆さん、どういうふうな発言をなさるのかなというふうに思って、私なんかむしろ、大学の哲学系の講義を聴いているようで、学部生時代とか、こういう授業もあったかなとかって懐かしく思ってたところもあるんですけど、なので、皆さんの反応なんか、質問とか、議論とかを興味深く聞かせていただきました。

藤山 : ありがとうございました。時間が迫ってきてますけども、最後にどうしても、もう一回、質問したいとか、あるいは、何か言いたいという人がいましたら、オブザーバー席のほうでも。黒田玲子先生は、前回も来ていただいて、ご発言されてないので。黒田玲子先生に締めてもらいましょうかね。

黒田 : 締めるんじゃなくて、発散するほうが好きなんで。西洋のものの考え方って、やっぱり人間が中心なんだろうなと。最後にもちょっと輪廻の話も出てきてるけれど、いろんな生物は、実は生物学が進んでくると、キメラができるようになったり、生物と、いわゆる、人間っていう関係がもっと近いっていうことが明らかになってきていて、そうすると、人間が中心であるという今までの哲学と違うものができてこないと、これから、今、左側、右側っていう話があったけれど、その間の関係性とか、変わっていかなくていいんだろうかという自分は感想を持ってお話を伺わせてもらいました。でも、すごく楽しくて、私はどっちかっていうと、左側にいる生物と戦う人間なんですが。

瀧 : 一言ですか。人間中心っていうのは、本当にキリスト教の人間中心もありますし、ギリシャの伝統でも人間中心ですが、ベルクソンの場合に話を限ると、直感というのは、対象のただ中に身を入れるっていう規定は、実は、人間でありながら、宇宙に自分を映してしまって、宇宙中心というような発想があって、それを共感によって、人ごとではなく、わがことにしていくっていう、自己を自己以外のものへと外に出しながらも、再び、それを自己のものとするっていうことが、対象との主客同一なので、この主客同一は、私がここにいて、私が中心になってっていう人間の話が、いったん、かっこに入れられて、つまり、人間的な持続。ベルクソンで言えば、そのレベルをはるかに、こっちに行ってしまうと全く違う。生き物の場合もあるけれども、物質なるし、こっちに行くと、天使なんだか神なんだか分からないけれども、そっちのほうに行ってしまうっていうようなところもあるので、直観の概念そのものは、人間中心主義の産物では、むしろなくて、外中心っていうふうにいえる、一つのトリックではないんですけれども、自分でありながら自分でなくなってしまうっていうことを主張してるんだと思います。

藤山 : ありがとうございました。まだまだオブザーバー席にもお話を伺いたいんですけど、時間が来ましたので、本日はこれをもって終了させて。あ、有信さん、お願いします。

有信 : この前はしゃべりたくないでしたけど、今回はしゃべりたいのに当てられなかったので、すいません。一言だけ。ヘブライズムとヘレニズムのところで感じたのは、要するに、ヘブライズムが統一、1 の分割っていう。実は、物理化学、フィジカルサイエンスっていうのは、全体を細かく分割すると、アナリストと、先生、おっしゃってましたけども、分割して、分割されたことによって、個別の知識がより定義が先鋭化し、先鋭化した知識の関係性

として、新しい法則性を、また新たな知識として核とすると、こういうやり方で、ずっと進歩してきてるわけです。実際に 1998 年頃だったかな。ブダペスト宣言というのが。

藤山：99 年。

有信：99 年だっけ？　ブダペスト宣言で、実は科学者が、今後、科学と科学のために何をやるかっていう宣言を出してるんですけど、当然、第一は科学のための科学、知識のための科学だったんだけど、そのとき初めて、4 番目に社会における科学、社会のための科学っていうのが入った。それを追求すべきだということで。これがかなりインパクトを持って、二つの意味で。

つまり、それまで科学者っていうのは、社会のことなんて全く考えてなかったと。つまり、より新しい知識、あるいは、その科学のためにやるというのが使命だということできてたのが、初めて社会という言葉が入って、社会という言葉が入った後、学術内で、随分、議論があって、一つは、より先鋭化させた知識を、今度はヘレニズムのほうにくるわけですけれども、その分割されたものを、さっき藤山さんは昆虫を分解してももとに戻らないって、先生もそういう言い方をされましたけども、先鋭化された知識を、要するに、社会のため、あるいは、何かのために新たに組み直して、新しい知識の体系をつくると。こういうサイエンスがあるのではないかと。こういう議論を、随分、やってきました。これはまだ実際には統治原理っていうか、指導原理がまだ明確になってないので、今、SDGs のようなものが出てくると、そういう意味で目的が明確化されて、一つの指導原理にはなるかもしれない。

こういう状況になっていくので、多分、これから、少しサイエンスに対する考え方も変わってくるかっていうことで、それから最後に一つだけ。先生が最後に愛とおっしゃったので、私はすぐ西田幾多郎を思い浮かべたんですけども、西田幾多郎の愛は、要は、無我の究極として、仏の慈悲につながるどういう形で、無我っていうのは、要するに、対象と自分の間との境界を全部取り除くと。これも、ある意味でサイエンスにとっては非常に重要なファクターになるので、このときの無我っていうことの意味も、もう少し考えてみたいなと思いましたという感じです。

藤山：はい。ありがとうございました。科学技術、これから 3 回ありますので、やりたいと思います。きょうは、本当に遅くまでお付き合いいただきまして、ありがとうございました。次回は科学技術の歴史をやります。よろしくお願いいたします。きょうは、瀧先生、ありがとうございました。盛大な拍手を。

（了）